

構造=機能理論 の 射程と限界

1. 序	1
2. 構造=機能理論の概式	6
3. <機能>とは何か?	19
4. 構造=機能理論の問題点	28
4.1 記述問題	30
4.2 相互連関問題	33
4.3 要件問題	38
(順序問題・要件分離問題・機能連関問題)	
4.4 評客問題	59
4.5 構造変動問題	62
4.6 複合問題	67
5. Parsonsのdilemma	72
6. 結	78
文献	82

橋爪大三郎

構造=機能分析 (Structural-Functional Analysis) 派は、社会学領域に現存する理論集団のなかで、最も有力なもののひとつである。「理論」を厳密な意味に考えるなら、殆ど唯一のものだ、と言っていいかもしれない。

社会学という難解な領域では、その比較的素朴な経験的知識の集積と、理論的な営為とが、互いに結びあっているわけでもなく、また、一定の方法をそなえた理論が実証的調査研究と習算する、などというようなことも、ない。——言ってみれば、社会学は、まことに原始的な状態にとりのこされている。

このように、あたかも沙漠のような現状におかれたとき、人はどのようにふるまうべきだろうか? ある人は、生えがかったいるありあわせの雑木をなんとか生長させようと尽力し、またある人は、根づくという保証のない樹をどこからか運んできて移植しようとする。(かく、いま最も欠けているものをそこに移植するのでないとしたら、どのような小手段の試みも、決して実を結ぶことはないだろう。

ゆたしのみるところ、社会(学)理論にいまもっとも欠けているのは、社会事象とよばれる一連の事態を成り立たせている根本的な機制をつかみとるような、「骨太の論理」であり、そのような論理を採擇することを可能とするような、透徹し一貫した視座であり、そこからまっとうな社会(学)理論を築きあげるまで粘りぬくような、掛値なしの努力である。これらが揃うことが、種々の要因によって、決して容易でない(なかつた)からこそ、社会学の食糧的理地が^{いっ}出来たのである、(かくまた、それが決して容易でないからこそ、もっとも試みるほうちのあることなのだ。(ゆたしが自分の仕事としてはじめた"記号空間論"も、そのような数ある試みのひとつに、ほかならぬ))

“記号空間論”の試みが成功するという保証は、実際のところ、どこにも与えられていない。それは、ただ、“記号空間論”が、自らの原理を具体的な諸領域のなかでどこまでもまろまろ明らかにしていき、ひとつの一貫した理論として成立しうることを示すことによっただけ、弁証されるのである。その作業は、目下独自にすすめられつつある。そして、限界に至るまで、すすめられる（しかない）だろう。この小論では、そのような“記号空間論”に固有の作業の本筋とは少しはなれて、なぜ“記号空間論”が、既成の諸理論とはなれた場所で、独自に自らを構成しようとするのかを、明らかにしてみたいと思う。それには、とりもなおさず、構造=機能理論と“記号空間論”との距離を、きちんと測っておくことが、大切であるだろう。構造=機能理論をどのように異化してみせるかによって、“記号空間論”がどこまで自らの方法的な根拠を掘りさげているかが、はっきりしてくるはずである。（構造=機能理論以外の立場も、それなりの力である度合に応じて、いかにも具化（ないし同化）の対象となるのであるが、とりあえてここでの課題とはしない。）

*

この小論全体の論旨の骨組みを、あらかじめここでのべておく方がよいだろう。

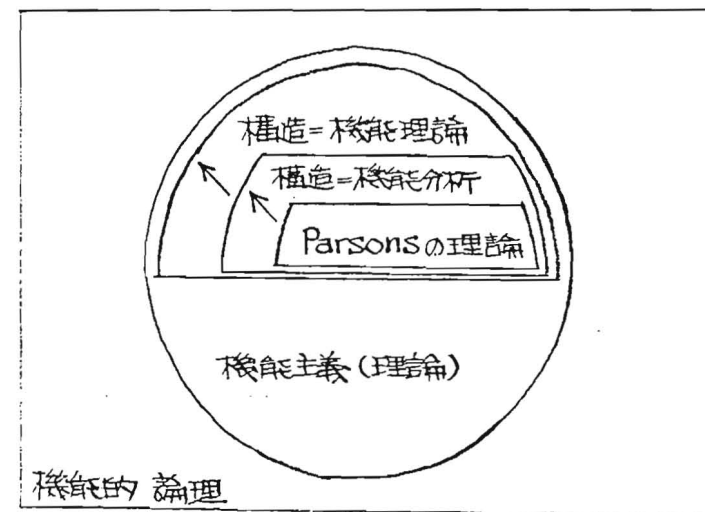
まあ、第1に、わけわけは、いわゆる「機能主義（Functionalism）」と、機能論（Functional Reasoning）とを、区別しておく。機能論とは、ひと口で言えば、「機能」という概念を用いて、特定の社会現象を解明し、説明しようとする発想法ないし思考法のことであるが、それに対して、機能主義とは、主要には機能論の組みあわせに拠って、社会現象の一般理論を構成しようとする理論上の立場のことをいう、と考えておく。機能主義の立場で構成される社会理論が、機能理論である。

ついで、わけわけは、いわゆる「構造=機能分析」を、このような機能理論のひとつとみなした上で、それを厳密に論理的に再構成

あることを、試みよう。このような、ある種の理想化、ないし純化の手続きを通じて、わけわけは、構造=機能理論の基本形式に到達する。この結果、構造=機能分析の分析能力の射程が明らかにされるが、それはまた同時に、構造=機能理論の方法的な限界をつきとめることでもある。

以上のような作業を通じて、第2に、構造=機能理論が、社会理論として、どのような本質的な限界をもっているかが、少なからず解明されることになる。この限界は、そもそも、機能主義が機能論に固執するが故に、必然的に胎児してしまうという点で、「本質的」である。私の予想では、この限界はあまりに基本的なものである。構造=機能理論は、「通常-科学」への途をみゆむとこそが、今後は、現在のような擬似(非)科学のまま延命するのではなく、社会の一般理論としては解消を待てるしかない、というふうにみこまれているのである。（機能論が、社会理論のなかから完全に駆逐されることは、ないであろう、が、だからといって、機能主義がこのまま承らえる理由は、ない。）

N.B. 機能主義に関連する用語の見取りが悪くなるといけないので、大略を図示しておこう(図<1>)。機能主義は、機能論を純化し、整合



図<1>

的に体系化し(そこ)に、生かす。そのなかで、最も洗練された形式が、構造=機能理論である。これは、Parsonsの所説ゆ、いわゆるAGIL図式を内に含むが、これは、いかに、構造=機能理論

特殊場合があるときみなされる、なぜなら、構造=機能理論は、構造=機能分析の論理構造を一般化することによって作りだしたものであるから。

このように、この小論全体は、構造=機能分析を方法論的に批判することと、企図している。しかしながら、この批判は、通例常識的に構造=機能分析の内容であるとみなしている諸々の論述や仮定には直接向かかず、より間接的に、理念化した（あるいは、批判のためにわざわざつくりあげられた）構造=機能理論へと向いている、という点で、構造=機能分析に通暁している研究者には、幾分奇異の念を与えるかもしれない。ここでもらた構造=機能理論は、吉田民人や小室直樹など、システム論的指向の強い日本の論客が描き直した構造=機能分析像と、やや重なるところが多いものの、理論とは名ばかりで、経験的な対象に関する言及を一切欠いた、神然たる論理的構築物であるように見受けられるから、である。“これは、一向に、構造=機能分析の批判になっていない。構造=機能分析は、多くの経験的な命題を含んでいる、にもかかわらず、そのように、理論の定質的内容には、まったく言及されていない。これでは、構造=機能分析を批判すると口では言いながら、それは似ても似つかぬものに喰ってかかっていることにしか、なっていないのではないか。”——

しかし、そのような印象を与えたとしても、ちっとも構わないのだ、と言おう。機能理論は、おそらく、当初、個々別々の経験的な事象を、素朴な機能的論理によって説明を試みるところから出発し、その成功に味をしめて、（せいにより広汎で全体的な事象に対しても、機能的な論理を適用できるように拡張されていき、ついに全体社会の体系をも専ら機能の観点から考察する、というふうに進化した、と言えさるう、大ざっぱには。それゆえ、現存の構造=機能分析には、特殊な経験的事象に随伴する経験的諸命題と、機能的論理を組みあがって主張ない（仮説される諸々の論理命題とが、な

いま世になつてくる。ところが、経験知として妥当であって、それを包摂している全体的な枠組みない（理論が誤っていたり、経験知として根拠のないが、全体的な立論に誤謬が含まれていなかったりすることは、しばしばである。それゆえ、構造=機能分析を考へる場合にも、その論理構成を、経験的な命題から区別してとりだすことが、その特徴をつかみとる、まづ鍵となるだろう。Parsons のような、素朴な部分を沢山のこしている構造=機能分析は、たしかに、鋭い直観的洞察に裏付けられた多くの妥当な経験的命題を含むであろう。が、そのことと、構造=機能分析の全体的な枠組みを信託すべきものであるとみなすこととは、ひとまず、別のことなのだ。

現在も、構造=機能分析派の内部で、構造=機能分析の論理構成を明確なものとしようとする積極的な試みが行われており、その仕事は、今後わいわいの意想不到的形に発展する可能性もある。しかし、それを待つておくことはできないので、こうした作業の結果明確になるであろう、社会理論としての構造=機能分析の全体的な枠組みを、わいわいはあらかじめ予想して、それを構造=機能理論と名付け、ここでの批判の対象とした。それが、「構造=機能理論の射程と限界」を論述することの、意味である。ここでとりあげなかった、構造=機能分析のより経験的、より具体的な指内容——たとえば、社会化の理論、云々——は、別の機会に、個別的な指領域のなかで、批判されたり、捨いあげられたりされるほかのものだ。

この小論を構想した当初においては、構造=機能理論の射程と限界とに関して、（〈言語〉派社会学の立場から）言うべきところを、過不足なく論じつくすつもりであった——ただ1篇の論文の課題としては、過大にすぎることは、もとより候知の上であったが。ところが、論旨をつめとっていく間に、ようやく気付かされたことであるのだが、構造=機能理論の論理構造を、さらにもう1歩突っこんで、充

分岐に論じざるためには、実は、どうしても、集合関数についての議論を自在に駆使するのをなければならぬようである。残念ながら、これは、いまの私の手に余る。(もっとも、私以外の誰かがこれをしていくわけでもないし、集合関数論がとりわけ重要だという議論もさほどきかないので、この小論の意義が、そのためにはなほだしく減殺されるということには、必ずしもならないと思うが。) といゆえ、もし当初の企図を達成しようといふば、集合関数論を用いたこの小論の原稿を書くのをなければならぬが、当分その暇もないままとなりそうなのだから、心残りである。

構造=機能理論の巖式

社会に關する機能論的思考法の淵源(自生的な機能理論)は、今日よりはるか以前にまでたどられしものである。というのは、これは、きわめて「自然な」発想に由来する思考法である、といえるから。社会学を揺籃した産業資本主義社会の時代思潮であった進化論もまた、そのような機能的思考の産物である。〈機能〉という説明原理は、死したく神の穴落をおぼるうために登場した、合理的思考の拮据駒のひとつであるのだから。(あるものの機能とは、あるものの外部にあって、そのものの存在をよしとするようなものである。) このようなわけで、社会システムの存立を弁証しようとする、さまざまの社会理論を、今日いうような機能理論の形に再構成することも、不可能ではない(といふどころか、ある場合には、いともたやかいわけである)ことになる。

(かく、ここをいちいち、素朴機能主義の諸形態にかのずらわっている必要は、ない。むしろ、この小論の目的からすれば、その最も発露した形態に、まっすまに目を向けることにした方が、

賢明である、といえよう。

*

構造=機能分析は、T. Parsonsの創案による、機能理論のまた新たなひとつの結晶である。前世紀の粗野な機能論に比較するならば、Parsonsの理論は、新たな衣裳をまとった現代的なものであるけれども、とはいえ、その完成度はまだまだ低いと言わなければならぬだろう。あるいは、Parsonsの議論自体が、いく時期かにまたがる首尾や試論の羅列的集積であって、各四でなされていく主張が相互にどのような関係にあるのか、矛盾を含まないものなのかどうかすら、誰にと、ともまだはつきり(こいなし、)という状態なのである。(これは、ちょうど、今世紀の前半、F. de Saussureや、J. M. Keynesの主張が、多くのく々に、つまぬ懸念と何ともいえずめとらえどころのなさとを同時に感じさせたのと、よく似通ったところがある、といつていいかもしれない。)

本論は、機能理論を論理的に検討しようとするのが本旨であるので、Parsonsの概説と文献的に検討する、等の仕事には、一切首をこまさない。(これは、専門の文々に、せひとも早くやりとげられた方がいい仕事である。) 私の位置づけによれば、Parsonsの理論は、機能理論の最も現代的な形態——構造=機能理論——と、最初とまると、たつと、構造=機能分析といふ星出したものであることにする。そして、このように見ることは、Parsonsが示しているような形の理論が、構造=機能理論の最終的な形を与えるものではなく、*one of them* になりかねない、と考えることに、等しいのだ。

構造=機能分析は、日本で、単に紹介されたばかりでなく、独自の発展をとげ、有力な理論上の一派をなすに至った、と喜んでいいだろう。現在までのところ、たとえば、小室直樹、吉田茂人が、そのようにして展開した構造=機能理論の、極を、ひたひたまでいれる。最初構造=機能分析を一般化しようとする、これらの試みと、

どう考えるかは、いまなお見方のゆがれるところであるかもしれない。が、確実に言えることは、論理整合性、論理的統一性になって考えられ、際限=機能分析をこのように一般化する事は、可能であるし、そうすることによってかえって辻褃の合う部分も少くはない、という事である。

このように、構造=機能分析に関しては、今後とも、いろいろなバージョン（versions）が出回って行く可能性がある。それらといちいち相対にしても始まりはないので、私は、構造=機能分析の論理を、以下にみるように、構造=機能理論の命題体系という形式に、抽象してみた。私の抽象作業にあやまりがないとすれば、この一般的構造=機能理論は、あらゆる構造=機能主義の理論的主張に共通する（であろう）特徴を、つかみだし、定着（てみせたもの）なのである。だから、たとえ Parsons 解釈の決着がどうつけられようとも、本論の論旨の妥当性は、ひたすら影響を被らないで、すむはずなのだ。

* *

構造=機能分析とは、とも、どのような仮定的言明の体系である（はず）なのか？ それは、必ずしも、当の構造=機能論者たち自身によっても、明瞭に自覚され、しかもつかまされ、表明されるわけでは無い。そこで、その論理構造を、とりあえず私的に整理してみるしかないのだが、たとえば以下のような命題系の形にまとめてみる事ができるであろう：——

- 0. 社会システムは、構造=機能モデルとして（だけ）、妥当に記述できる。

これは、構造=機能主義の結論的な主張点であり、構造=機能論的アプローチによる分析の、前提を構成する。この命題の内実は、ひたすら以下に示す諸命題と噛みくだかれるようなものである。すなわち、基本的には、3つの部分からなるもののように、扱われる

だろう。はじめの部分、社会システムの記述に、第2の部分は、社会システムの評価、すなわち、機能要件に、その第3の部分は、構造変動に、かかわる。

N.B. これは「社会システム」とは、全体社会の体系をさすばかりでなく一般に、10-11-11-11体系など、社会理論が分析の対象とする、任意のシステムを、さしづめる。

- 1. 社会システムは、相互に関連（あるいは変数（変項）の集合として、描きだされる。

1.1 （直接に観察可能な）社会システムは、1個の木準変動のある社会変数と、それらの間の（相対的に固定的、安定的な）特定された関係とから、なる。

1.11 木準変数を、 x_1, \dots, x_n 、それらの間の関係も、 f_1, \dots, f_n 、と名づける。

N.B. ここで 変数の個数(n)と、関係の数(n)とが等しいことの解釈については、1.32 を参照のこと。

1.12 当該の単位観察中間中においては、木準変数が変化するとしても、それらの間の一連の関係（ないし、それを構成する構造変数）は、変化しない。

1.2 社会システムを記述するとは、現象を構成する社会事象のなかから、1個の木準変数、および、それ以外の構造変数とその値（木準変数の連関と相互に制約する関係）を抽出し、社会モデルとして組み立てることを、いう。

1.21 社会システムは、（原理的に）記述可能である。

N.B. これは、理論である以上の、構造=機能理論の信念である。しかし、構造=機能理論が、これまで社会システムを十分に記述（えたという）

けではないし、もしかすると、実際上の記述可能性に何れが基本的な制約がある、と考へるべき所のかもしいない。詳細は、28 ページ以降をみらいたい。

1.22 考えられる、社会システムのあらゆる状態を、変数 x_1, \dots, x_n の直積空間 (の部分集合) X として、あらゆることのできる。

1.23 社会システムが実際にとることのできる状態を、限定して示すような制約条件のひとつ f_i は、 X の (真)部分集合 X_{f_i} を指定する関係式 (11) によって、与えられる。

$$(1) \quad X_{f_i} = \{x : x \in X, f_i(x) = 0\}$$

N.B. $f_i(x) = 0$ は、論理的に要請される方程式を、記号的に示したものである。

1.24 与えられた制約条件——水準変数を考察する場合に所与である関数形——の全体 F を、その社会システムの構造という。

$$(2) \quad F = \{X_{f_1}, \dots, X_{f_n}\}$$

$$1.241 \quad X_{f_i} \neq X_{f_j} \quad (i \neq j)$$

1.3 社会システムは、確定である (一義的に、水準変数の均衡値を定める)。

N.B. 一般に、社会システムが (つねに) 一義的な均衡解をもつかどうかは、全く保証のつきりではない。それは、まったく当該システムの構造いかんによって依存している。したがって、1.3 を要請しない方が、構造=機能理論を一般的に扱ったことになるだろう。しかし、ひとつには、論述を簡潔にするため、もうひとつには、(実際社会システムは、ある時点においてはある 1 状態にあると考えられるから) 適当な記述によってモデルを構成するならば、ちょうどシステムが確定になるようにできるのではないかと

と思われぬため、一応は、1.3 を仮定しておく。

1.31 均衡値は、添字 0 によって示す、すなわち、

$$x^0 = (x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0) \in X.$$

1.32 システムの均衡値が確定である、とは、所与の構造 F のもとにおいて、

$$(3) \quad \bigcap_{i=1, n} X_{f_i} = \{x^0\}$$

なること、である。

N.B. (3)式は、当然、

$$(4) \quad x^0 \in X_{f_i} \quad (i=1, n)$$

なることを、含意する。

Walras の一般均衡理論においては、 n 種の財の均衡価格、 p_1^0, \dots, p_n^0 を決定するのは、 n 種の財の市場における、 n 本の需給均衡方程式 $X_i^S = X_i^D$ ($i=1, n$) である。(Walras の法則そのほか、若干にわたる附随的、技術的議論をさしおいて、のべている。)

Walras は、未知数である変数の個数と、均衡方程式の数が一致する (ともしんである) ことをもって、システムの解が一義的に決定される条件とみなした。しかし、このような単純な関係は、もちろん、線型体系などごく特殊な場合にしか成立たない。しかし、いわゆる「小室システム」(後出) のように、非線型の方程式体系を考へるような一般的な場合にも、(「記号的に」あらゆる便宜のために) 方程式の数を n 本とし、之に、過剰決定 (over-determination) も、また過少決定 (underdetermination) も、存在するものがある。1.32 式に、 $i=1, n$ とあるのは、この慣例に依つたものである。しかし、良かれ上、何本の方程式がモデルに表現されているかではなくて、 n 種が均衡を確定するものであるか否か、モデルにとっては本質的である。

1.33 均衡値 x^0 は、最終的には、所与の構造に依存して定まる。すなわち、記号的に、

(5) $x^0 = x^0(F)$

とあらゆせる。

1.34 構造 F が変化しない限り、このようにして定まった均衡値は、変化しない。

N.B. 吉田氏は、別の見解をもっているがここでは、これを、構造=機能理論の一般的な形式とし、採用しない。(→吉田 [1974:213])

2. 社会システムの状態(均衡値)に対応して、その社会システムの、機能の充足度が、定められる。

この命題が、機能的論理の発想の大前提であることは、いうまでもない。これを、さらに詳しくのべよう。

2.1 社会システムの各状態に対応して定まる値の集合を考え、これを、機能要件空間 R (以下、「要件空間」と略称ある)とよぶ。

2.2 要件空間は、社会的な変数の直積空間 X から、ある写像、あるいは、機能要件関数 FR によって、生成される空間である。

(6) $R = \{r: r = FR(x), x \in X\}$

N.B. (6)式は、 $R = \{r: r = FR(x^0)\}$ と書くべきかもしれない。X の要素のなかには、あよそ均衡値とたりようはない、絶対に社会の状態としては出現しないようなものも、含まれていることが考えられるから。

2.21 機能要件関数 FR は、当該モデルにおいて、不変である。

2.3 要件空間 R は、当該社会システムの機能を評価する。

2.31 R のある要素のあいだには、順序が定義できる。

2.32 R に、適当な完全(半)順序(たとえば、P)が定義できたとき、R は、単要件空間(ただ1つの機能要件をもつ要件空間)である。

N.B. ある順序 P の完全性とは、空間の任意の2要素間に順序が成立すること、あるいは、

(7) $\forall FR(x_1), \forall FR(x_2) \in R$
 $\rightarrow FR(x_1) P FR(x_2) \vee FR(x_2) P FR(x_1)$
 であることをいう。半順序はつぎの2つの公理を定義する。

(8) $FR(x_1) P FR(x_2) \rightarrow FR(x_2) P FR(x_1)$

(9) $FR(x_1) P FR(x_2) \wedge FR(x_2) P FR(x_3)$
 $\rightarrow FR(x_1) P FR(x_3)$

ただし、 \bar{P} は、P の不成立をいう。詳しくは、Debreu [1959] をみよ。

2.33 一般に、社会システムの要件空間は、単要件空間ではない。(あるいは、構造=機能モデルは、要件空間にただひとつの機能要件を仮定してあまることが、できる。))

2.34 要件空間の各要素が、それぞれ適当な順序を定義された m 個の変数の、直積空間の各要素と、1対1に対応するときには、その要件空間は、m 個の機能要件からなる、と考えることができる。

N.B. 上の対応では、もちろん、要素間の順序も、同じかゝ保存されているものとする。

2.4 要件空間のつくり方からして、システムの諸制約条件の要件空間における像は、確定である。

$$\begin{aligned}
 (10) \quad FR(x^0) &= FR\left(\bigcap_{i=1, n} X_{f_i}\right) \\
 &= FR(X_{f_1} \cap X_{f_2} \cap \dots \cap X_{f_n}) \\
 &= FR(X_{f_1}) \cap FR(X_{f_2}) \cap \dots \cap FR(X_{f_n}) \\
 &= \bigcap_{i=1, n} FR(X_{f_i})
 \end{aligned}$$

N.B. 2.2のN.B.はここで適用する。

2.41 ある均衡値 x^0 の、要件空間 R の写像の、逆像を、その均衡解と同じく評価される社会システムの状態、とよぶ。この状態に相当する X の部分集合を X^{x^0} とかけば、

$$\begin{aligned}
 (11) \quad X^{x^0} &= \{x : FR(x) = FR(x^0)\} \\
 &= FR^{-1}(FR(x^0))
 \end{aligned}$$

$$2.42 \quad x^0 \in X^{x^0} \quad (\{x^0\} \subset X^{x^0})$$

2.42 X^{x^0} は、 X における類別になっている。

N.B. 要件空間で定義される順序は、変数空間 X での、 X^{x^0} の順序関係にうつろえて、議論できるほかである。

2.5 一定の社会システムの構造 F のもとで、その社会システムの状態が、要件空間の要素 r に写像されているとき、この値 r を、構造 F のもとでの当該社会システムの全機能、という。

$$\begin{aligned}
 (12) \quad r &= FR(x^0) \\
 &= FR(x^0(F)) \quad (15)
 \end{aligned}$$

2.51 一定の構造 F のもとで、社会システムの状態が、かりに x^0 から $x^0 + \Delta x$ に変化したとすると、これに対応する要件空間の値の変化 $FR(x^0 + \Delta x) - FR(x^0)$ を、構造 F のもとでの、社会(水準)変数による機能変化、と

という。

N.B. 要件空間 R においては、演算も何にも定義されていないのだから、ここでいう $x^0 + \Delta x$, $FR(x^0 + \Delta x) - FR(x^0)$ など、みな、単なる記号的な表記として用いている。厳密に考えおとすには、全機能の任意の順序数について、適当に $\rho(FR(x^0 + \Delta x), FR(x^0))$ を定義しなくてはならない。

2.511 状態の変化が連続的であり、機能要件関数 FR も (なめらかに) 連続であるときには、11の ρ を機能変化の極限 ϵ とって、構造 F のもとでの、社会変数 x の限界機能 $\frac{\partial FR(x)}{\partial x}$ を定義することができる。

N.B. 1変数の限界機能を表示するには、 $\frac{\partial FR(x)}{\partial x_i}$ を考えるべきであるが、白倉幸男の主張する超比較静学の考え方にたち、多変数が同時変化するより一般的な場合を、ここで採用することにする。

2.52 一定の構造 F に関して、ある変動が生じ、それが F' に変化したため、旧均衡値 x^0 もまた、新均衡値 x^0' に変化したとき、これに対応する(全)機能の変化 $FR(x^0') - FR(x^0)$ を、構造変動 $F \rightarrow F'$ に由来する機能変化、という。

2.521 構造変化も機能変化も連続的になめらかなるときには、ある構造 F の限界機能を定義することができる。

2.6 要件空間 R は、その(真)部分集合として、許容域 \bar{R} をもつ。

2.61 許容域は、許容条件(要件空間における、ある制約条件)をみたすような、要件の値の集合である。すなわち:

(13) $\bar{R} = \{r: \bar{R}(r) \geq 0\}$

N.B. ここで、 $\bar{R}(r) \geq 0$ は、許容条件を、記号的に表記したものであり。

2.62 許容条件は、当該観察期間において、不変である。

2.63 要件空間における、許容域の相対補集合を、非許容域 \bar{R}^c という。

(14)
$$\begin{aligned} \bar{R}^c &= R \sim \bar{R} \\ &= \{r: r \in R, r \notin \bar{R}\} \end{aligned}$$

2.64 許容域の要素と非許容の要素とのあいだに、順序がつくときには、許容域の要素の方が非許容域の要素よりも下位にあることは、存し。

2.65 均衡値 x^0 の要件関数による像 $FR(x^0)$ が、許容域にあるときは、構造が変化することは存し (構造維持の仮説)。

N.B. あるいは、この仮説を、記号的に示すならば:

(15)
$$\begin{aligned} \forall F / FR(x^0) = FR(x^0(F)) \in \bar{R} \\ \implies F \rightarrow F \end{aligned}$$

とかける。なお、2.61 による許容条件は、吉田理論による許容概念がもっているおと、主観的合意はもっていないので、2.65 の仮説も、こうした主観的合意と無縁である。

* * * *

3. システムの均衡値 x^0 の像が、非許容域 \bar{R}^c におちる場合には、必ず、向らかの構造変動が、生じる (構造変動仮説)。

3.1 構造変動は、システムの制約条件を、少なくともとてひと

つ、変化させる。

3.2 構造のある要素の変動は、記号的に、つぎのようにあらわせる:

(16)
$$X_{f_i} \xrightarrow{SC} X_{f'_i}$$

あるいは、

(17)
$$SC(X_{f_i}) = X_{f'_i}.$$

ただし、SC は、構造変化をあらわす関数の、記号的な表現である。

N.B. (16). (17) による SC を、構造のある要素の変化をあらわす関数と考えるとすれば、SC は、 2^X から 2^X への、self-map である。

3.3 構造一般の変動は、記号的に、つぎのようにあらわせる:

(18)
$$F \xrightarrow{SC} F'$$

あるいは、

(19)
$$SC(X_f) = X_{f'}.$$

N.B. (18). (19) による SC を、構造変動一般をあらわす関数と考えるとすれば、SC は、 $(2^X)^n$ から $(2^X)^n$ への、self-map である。

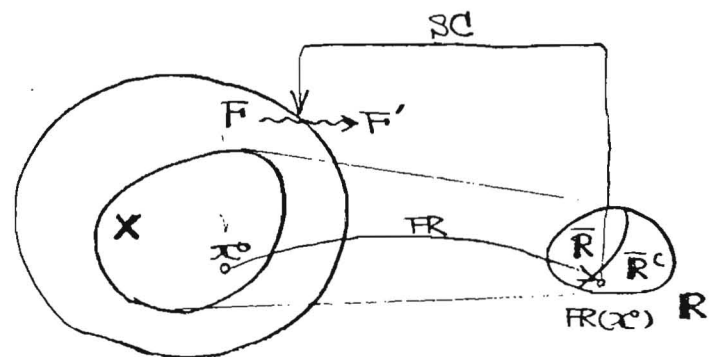
3.4 構造変動の結果、新しい構造のもとで、新しい均衡値が定まる。 (cf. 2.52)

構造が変動するとしても、それを記述するための、理論の枠組み (たとえば、構造変動関数 SC) は、変化しない。

* * * *

さて、以上のバキたったような、構造一般モデルに関して、簡明な見取りを与えるために、つぎのような図を描いておくのも、

決して無意味ではあるまい：



図(20) 構造=機能モデル

このような構造=機能理論の定式化は、必ずしも唯一の仕方ではないだろう。また、矛盾や誤謬を含んでいいるなど、定式化それ自身に何らかの問題性が、含まれていいるとは言いきれない。しかし、論理の筋道から推していく限り、どのような構造=機能主義の議論といえども、いま掲げたような一連の命題体系に服従せざるを得ない、と行ってよいだろう。少くとも、私は、そう考えている。そこで、以下「構造=機能理論」というときは、ここで定式化したような厳式をなした理論のことである、と考えてもらうことにしよう。

構造=機能理論の論理構造を、わざわざできる限りに定式化してみせたのには、もちろんそれなりの理由がある。それは、たんに、表記をより簡潔、より正確にしよう、というようなことではなくて、構造=機能理論の骨格的な論理の構成を、的確につかむこと、と、之、それが、いかに克服しがたい諸々の方法的な矛盾・難点に満ちたものであるのかを、その厳式を手掛かりにして、明瞭に介擧して示したいから、にほかならない。はじめに、定式化を行っておくからこゝろ、分析論理の各局面において、構造=機能理論に固有の一連の問題が湧出してくる必然性を、明瞭にする余地も生かすのである。こうした難点は、構造=機能理論の方法に本質的であるので、私のみるどころ、構造=機能理論が之れを解決する日は、決して訪れないであろう。

N.B. 構造=機能理論に対する私の批判は、イデオロギー批判や価値的でない反感、反撲といった、外在的な批判ではないのはもちろんなこと、構造=機能理論の論理の不整合をみつけてついたり、個別問題に対する分析能力を問いたりするという部分的な批判でもない。とゞきはなくて、内在的な批判——凡そ理論が、構造=機能理論の手法を採用しようとする限り、隆着せざるをえないであろう限界を、機能的論理に内在することによって 予料してしまおう、という、一層本質的な批判であることをめざしていろいろのち。

しかし、格別の想知もなく、このようなことを言うのは、どうということもない。以下では、順次、私の主張の根拠を与えていくとしよう。

〈機能〉とは、何か？

機能的論理とは、何か？ ——この問いを突き詰めていくならば、それは、ホリホリのところ、機能（と言って要すれば、機能的要件 (functional requisites) という概念をたてるかどうか、が山岐目になる、と言ってよい。したがって、機能主義に対する批判が、機能要件仮説に依り論点を外らしてはならないのは、当然のことである。

機能要件の概念が、どのような困難を伴った仮説であるか、については、後述するとして、ここでは、なぜ、機能的論理を、他と区別して、殊さら、ひとつの論述のタイドとしてとりだすのか、について、少々おぼえておくとして—— 先の定式化、ことに、3の仮定群 (構造変動仮説) に照準にあらわれているように、機能的論理は、観察可能な現象を記述的に説明するために、機能という、抽象的な要因を設定し、そうしておいて、現象と機能 (何らかの意味での、基準) との間に、フィードバック・ループを結ぶようなモ

アルをたてる、という点で、基本的に言って、制御理論 (Control theory) と同型である。(あるいは、発想の順序としてみるならば、向らかの制御ループが存在しているところには、なべて、機能が存在している、と考えている、といった方がよいかもしいない。) 実際制御論の内容と、機能論の内容とは、互いに区別できにくい。では、どこが一致する(と考えられる)のか?

制御は、本来、工学的な概念である。工学的であるとは、制御の過程を構成するフィードバック・ループの作動を、金物 (hardware) として構成することができる。あるいは、生物学ないし生体工学の場合のように、解剖学的ないし生理学的に、検証できることを、意味する。総じて、制御の過程とい自身が実物として存在しているのだから、制御という実践的な課題を果たすことは、できないといってしまう——なぜなら、制御工学の課題とは、このような制御の回路と、それに流す制御情報とを、実際に設計し、組立てることであるのだから。制御理論は、直接に実験可能な水準に属する概念だけから組み立てられており、その点で、相互連関分析と何らかゆるところがあるわけでは、ない。

それに対して、機能の概念は、いささか趣きを異にする。機能という概念内容とい自体が、すでに必ず、理論的な構成物 (theoretical construct) であり、純然たる抽象物である。機能に対応するいかなる実体も、いささかに見出されるわけではない。この点で、しばしば見逃されがちであるから、少々強調しておいてもよいだろう。機能というのは、基本的に言って、観察者ないし理論家の側からする、解釈の枠組みである。それは、対象的な世界の連関・連動の仕方に関する、ある抽象的な把握なのだ。だから、どう解釈したければ、いかなる制御も、ある一定の機能を果たすものだ、と解釈することができる。逆に、あるものの機能を考へることは、どこに何か制御の回路が存在するだろうことを、暗黙のうちに想定してしまっていることだ、と云ってよい。(したがって、生理体や有機体をなないし、社会現象など、制御の回路が必ずしも明視的には存在して

いないところへ、機能の概念をもちこむことは、それを、制御の回路(の複合)として記述・解釈(よう、という、思いついた仮説を行って)いるに等しいのである。

N.B. 実体的な過程が見出されていようといはいと、あるいはまた、フィードバック的にはたしか回路を構成する現象の実態がどのようなものであるかと、一切あかまいたしに、何でもいっしょくたにして、制御過程として取扱っているところと、機能主義の本質的な性向をみとめておいても、よいだろう。

制御の回路が特定できないような場合、たとえば、全体社会の体系に、機能論的な解釈の枠組みをもちこむと、どのようなことに存在するだろうか? もともと、制御回路がどこにあると断言できないために、至るところに制御の回路を想定できることになり、機能は、社会的な相互作用の網の目の目のなかで、きりめて取扱いのたかたしい概念にたつてしまう。(機能概念を算入することによって生ずる、解釈の効力が、逸落していくことになる。)

制御の発想は、もともと、機械論の延長にある。といゆえ、制御過程は、せむらず、それを実現する、より機械的な過程の存在を、前提にしている。ところが、現象的にみるならば、社会現象の内部にもまた、多くのフィードバックの回路が見出されるように思われるから、当然、制御理論を社会理論のなかにもちこんでみようという試みが、おこってくる。たしかに、人間は、厳格な規律に従うこともできるから、軍隊や、裁判の過程は、非常に機械的だと表象することができるのだ。(こい、人間観として失当であるのは、すぐわかるけれども、機能主義一般を批判するのは、それほど易しくはない。)

*

機能 (的零件) という概念は、上でのべたように、純然たる仮設構成体である。ところで、仮設構成体を作りあげる以上は、理論は、

そのような方法が必須であるといえるための一連の条件を、自らが
みだしにしていることを、示さなければならぬだろう。わいりわいが、
社会の機能主義的理解に賛成しないのは、機能が仮設構成体だから、
ではない。そうではなくて、社会の機能理論は、その条件からみて、
方法として問題がある、という理由で、わいりわいは機能主義を批判
するのである。機能理論は、制度理論と、外見上同型であるとして
も、制度の実体的な裏付けをそなえていないわけではない。したがっ
て、機能を想定することが妥当であるかどうかは、機能理論を以て自
身のなかで、検討さなければならぬ。か、機能理論が、自らの
機能要件仮設を弁証しおこなうかどうか、を見るのは、もう少々先
にのびして、ここでは、仮設構成体について、検討しておく。

(たとえば、機能のような) 経験的対象物のなかに抽象的な存在物、
いわば、「得体の知れないもの」を、理論のなかに包摂することに対
して、強い難色を示すという立場の人々がいることは、たしかだ。
機能主義の社会理論は、その点、より甚大ではあるが、
一体どう考えた上でのことなのだろうか？ 機能主義者の口から解答
をきくことは、望みうすないので、わいりわいは、独自に推論をすすめ
てみる。

なにゆえ、仮設構成体をたてることも、耳とさいるか？ — 二
いによく似た事情は、言語学でも論じられてきたので、まず、そち
らを紹介しよう。

- ・ N.B. 歴史的な順序から言えば、Traubetzkoyら、フランク学派の
音韻研究が、音韻を音声とは異なる水準の事象として介紹し、のちの構
造主義を基礎づけるに至った方法論的根拠 等について、誤りおこ
りあつた方が、好都合かと思われる。

N. Chomsky が学界に登場する以前には、アメリカの言語
学界は、L. Bloomfield の主張する行動主義的な方法論の薫陶を
受けており、観察可能な事象にのみとづいて言語理論をたてるの

でなければならぬという原則が、一般にうけいれられていた。二
れに対し、Chomsky は、文を生成する規則の体系として文法を把
握する というアプローチに立って、既存の行動主義的な言語分析の
枠組みに対抗し、文には、観察可能な表層には還元することのでき
ない深層が存在すること、文を妥当に記述するためには、抽象的な語
概念(文法諸要素、たとえば、NP, VP, ...) をたてることが不可
欠であることと、厳密に例証してみせたのである。

N.B. 生成文法の主張は、抽象的な装置(文法)によって観察可能
な事実(文)を記述しようとする点で、古典的な行動主義とは全く発想
が逆転しており、その範囲を完全に超えるものである。ただし、これを
つづ、Chomsky 流の理論が、行動主義の範疇を全く超えた
とみるのは、早急であるだろう。生成文法のアイデアは、広義の操作
主義のなかに、含まれるといえるはずである。

言語理論を構成する際に、Chomsky の探っている態度を、ま
とめてみると、次のように言えるであろう。

- ① どのような理論的構成物をつくりだすとも、理論家の任意
である(ただし、理論内部の無矛盾性、論理的な整合性は、
確保さなければならないものとして)。
- ② 言語は、然るべき理論的構成物を介さなければ、記述も分析
もできない。
- ③ 同一の記述—説明力がある場合には、なるべく可能な理論の
うち、簡潔(simple)な理論の方を、とらなければならぬ。
すなわち、余剰な理論的構成物をつくりだしては、ならない。

この内容が、機能の概念を記述するがための規準としても通用する
ような、方法論上の一般性をもっている、と考えられる。

N.B. 初期にChomsky が提出した言語分析の枠組みを紹介し
ておけば、上にあげた①～③の指針の意味するところも、より明ら
かになるだろうと思うので、参考のため略述してみた。

Chomsky は、3つの典型的なタイプの言語理論(文法)と、生成文法の形に提示してみせたあと、そのおのおのの妥当性を問うている。之いふとは、(a)有限状態文法、(b)句構造文法、(c)変形文法。の3つの文法のうちであるが、最後の変形生成文法に、Chomsky 自身の立場が築かれんとしているのは、言うまでもない。さて、ここで、Chomsky は、人間の言語を妥当に記述するための理論としては、(a)は適当でなく、また、(b)および(c)がすぐれていると、考えなすべし。有限状態文法(2)が、妥当な理論でないと思わされたのか?

有限状態言語は、機械処理に及ぶしいような種類の文からなる集合である。というのは、有限状態言語の文であるならば、どの文であらうとも、左から右へ(あるいは、上から下へ、すなわち、始めから終りへ)生成され、よみとらいにくいことが出来るから。この意味で、有限状態文法は、操作主義的観点からみて申し分のない文法であると、言うことが出来る。有限状態文法は、こうして、文を、直接観察可能な記号の連鎖としてだけ、とり扱おうとするのである。かく、人間の言語には、有限状態文法ではどうしても生成出来ないような文が、存在する。すなわち、人間の言語は、有限状態言語ではないことが、容易に証明されてしまうのである。

文法は、伝統的・歴史的に、Eと之は「主語、述語、目的語、…; 名詞、動詞、形容詞、…; 能動態、受動態、…; 等等」といふ諸概念を用いてきた。之いふは、言語の観察可能な事象に直接見出されるものではないし、こうした概念に関わる(明示的な)知識を必要としないとしても、人は自在に言語を喋ったり、理解(たり)することが出来る。之いふ之、こうした文法的な諸概念は、のこらず、言語に關して分析的な考察をすすめるようとする理論家が、考案したものであることに、間違いない。ではなぜ、そのような概念を、文法理論が採用してきたのか? そのよは、余計な理論的構造物を用いないで、文法を組み立てることは、出来ないのか? ——有限状態文法の挫折は、こうした本質的な問いにこたえをみちを、はじめを示した

ものだ」と言っている。

有限状態文法は、文を分析するのに、記号(形式素)と、その連鎖のなかでの左右関係との、2つの概念しか用いていないのであるが、これだけでは不十分である、より抽象的な反復構造物を必要とすることは、11のゆき構造的同意異義(constructural homonymity)を示すような文が存在する、という事象からも、明らかに示されている。構造的同意異義の最も有名な文例は、Chomsky のあげた、

(21) Flying planes can be dangerous.

であるだろうが、ここでは、梅田[1974:188]から、ついでに、

(22) We heard all about her escape from John.

この文は、「ジョンから聞いた」、「ジョンから逃げた」の両様に解せられるが、この現象は、(22)の文をEが読められるだけでは、11までたつても、解明されない。之にあらぬでない、文法解釈を用いて、次のように分析するのでなければ、意味解釈のちがいが生ずる理由が明らかになる。

(23) a. we [vp [v heard] [np all about her escape] [pp from John]]
b. we [vp [v heard] [np all about her escape] [pp from John]]

構造的同意異義の文例は、おぼろげに、11くらでも追加することが出来る。たとえば、久野 謙は

(24) Time flies like an arrow.

に5通りもの意味解釈が(無理をいふ)可能であることを、紹介している(久野 [1977])。

構造的同意異義の存在は、文法諸要素のような、より抽象的な分析装置を、文法理論が含むべきであるということも、明らかにし

たが、証如は、そのほかにも多くある。

さて、Chomsky の方法論的態度のうち、テーゼ ① を、ゆるいけれども自明と考えよう。厳格な操作主義者、保守的な行動主義者でもない限り、しかも、この ① をみとめたいと言いはる者は、おるまい。そして、保守的な行動主義の立場に立つ人々の社会理論は、さしめて怪訝な議論に充ちていて、と言えらるる。

N.B. Chomsky は、やみくもに仮設構成体をつくらぬというのではなく、必要最小限、やむをえない場合に限り、仮設構成体をたてよ、と言っている。この言語学のならぬでいえる、機能理論は、自身が記述的妥当性を有する理論であることのほか、機能概念をたてることもしない理論(相互連関分析)が、自らに較べて「劣る」理論だ主張(なければならぬ)。実際のとこ、相互連関分析が社会理論として成功しないことを、機能理論が証明できるとは思えらるるが、ただ機能主義者が、どう信じていることは、確かにおるる。

そこで、つづく ②、③ の論点について、よく考えてみる必要がある。

Chomsky は、言語記述に変形規則が必要であることを、「簡潔性の規準」によって要請しているのであるが、具体的にどういふ文法を提案するかをめぐって Chomsky と今日立場を異にする人々も、言語理論(文法)を構成する仕方に関していえば、Chomsky の考えを大筋で承認し、Chomsky と同様の規準を前提にしている、と言てよい。たとえば、最近、井上和子のように、日本語の文法に変形規則は必要でないという仮説を提出する学者も、出てきたりしているので、Chomsky 革命以後の変形生成文法派も、いよいよ救い難い混乱に陥っている、というような印象をうける人も、あるかもしれない。しかし、言語理論に関する規準が存在しているからこそ、いくつかの立場の分岐が可能なのであり、論争もまた可能と

なっていることを、忘れてはならない。(少なくとも、生成文法の枠組みを承認する人々の間では)たとえ自分たちの立場(仮設)がどのような分岐(ようにとも、その対立は、論争によって決着をつけることが(原理的に)可能だ、とある確信があると言えらる。このように、理論というものをどのように発展させていくのかに關して、共通の規準ないし合意が存在している、という点で、言語学は際立っている、と言えらるる。

それに対して、社会理論は、ちょうど言語理論と対蹠的な、無秩序状態にある。しかし、ここでは、構造=機能理論は、語を限定しよう。構造=機能論者は、<機能>概念を仮設する以上は、つぎのあたりを(暗黙のうちに)前提しているほかである。すなわち、

- ② 構造=機能理論は、記述的に妥当である。
- ③ 構造=機能理論は、相互連関分析よりも、簡潔性の規準において、優っている。

構造=機能理論にとっては、<機能>概念をたてることをしない相互連関分析が社会理論として妥当でないことを論証できたと言えらる、これは自らの方法論的根拠をかためるものはないであろう。しかし、先ほどの有限状態文法/句構造文法の場合と異って、両者は、記述的妥当性の有無という形で決着が付きそうに、ない。というものは、構造=機能理論の範疇として示した命題群 1 が明らかになっているように、構造=機能理論は、相互連関分析を含みこんでいるのであるから、自らが妥当であるのに相互連関分析が妥当でない、とはとても言えないからだ。とすれば、相互連関分析より余分な理論的構成物を含みこんでいる構造=機能理論に、あげて検証責任がゆつさ、てくる。そこで、③のように、記述の簡潔性に關して、相互連関分析を斥ける所か、なくなるのだ。

②、③ が成立しないとすれば、構造=機能理論の根拠は、大いにおびやかされる、と言ていい。では、②、③で、構造=機能分析は、果たして検証しあおせるのであろうか? といは、容易でな

いが、ことに②が困難であることは、言えるのではないかと思う。しかし、この点は、のちに72頁以降を再びとりあげるとき、しばらく横にのけておこう。構造=機能理論がいかに関与しているか、は構造=機能理論の論理構造をさらにたらいってしらべてみてからでなければ、何とも言えないからである。

構造=機能理論の問題点

構造=機能分析がどのような主張を伴っているのか、つきつめて考えてみると、それがあまりにもあいまいなものであることに、人は誰しも気付くことになる。その大きな理由のひとつは、現存する構造=機能分析が、きわめて「未成熟」であって、たとえば、経験的一般則と論理命題とが区別されていない、条件と帰結とが区別されていない、など、総じて、自らのとっている方法に無自覚であるから、である。ゆえに、誤謬の本と一緒に赤ん坊まで流してしまうという行きすぎから見れるために、構造=機能分析を理想化し、さきに、構造=機能理論の一般的範式の形で、示しておいたのであった。ゆえに、以下で批判の対象とするのは、このような、理想化された限りの構造=機能分析、すなわち、構造=機能理論にほかならない。

こうした理想化によつて、従来、Parsonsその他の素朴な構造=機能分析に対して投げかけられてきた批判のあらかたは、妥当なものことが示されるだろう。《構造=機能分析は体制維持の思想である》などとハイデゴロギー批判をはじめから論外としても、構造=機能分析は動学的な分析を扱うにたえないのではないか、AGILの果敢の内容がはっきりしていないではないか、などとといった批判をいふときは、構造=機能分析の論理に内蔵する問題点を斬くものでは

ないから、である。

しかし、理想化によつてこのように少なからぬ批判をかわすことができる反面、いま一方で、それは、新たな批判をまねくことになるだろう。構造=機能理論のロジックを厳密に示してみようとして、あでにかかげたような形式化を施してみたりすると、それが、抽象的であつて、具体的・経験的事実との結びつきが稀薄になるため、見たところ納得しにくい命題体系に変わってしまう、そのためかえつて、方法論的にみて批判すべき箇所が盛呈してしまうから、である。これを、どう考えるべきであるか？

伝統的な、なにより、より探知的な機能論者たちは、機能主義を形式的に再構成する試みに対して、冬かいたなかれ反響を示すことがあつた：《ある事態を、より具体的なまま、具体的な機能の枠組みに即して解釈しておけば、判りやすいものを、なげやうで、好きにのんで、抽象化したりするのか？》（しかし、ゆえゆえは、ざやくに、こう考えよう——機能による事象の説明が、経験に密着した具体的な陳述であるあいだには、よくそれを了解されるのに対し、個別的な経験をなげやうで一般化されるあいだには、それほどよく了解されなくなるというならば、それは、機能という概念自体にもともとそれほどの説明力があつたとは考えられない、ということではないのか？）すなわち、具体的なある事象が、よく解明された、という印象を与えるのは、決してそれが機能主義の枠組みによつて扱われたからではなくて、むしろ、あらかじめ、日常的な解釈枠組みのなかでその事象がすでにしてく々に了解されているためだ、とは言えないのだろうか？（もっとも、機能的論理は、自然的な発現の形、機能主義と結びみやあり、ということば、あるかもしれないが。）とあれは、形式的な抽象を施すことによつて、機能主義が「よそよそしい」ものになる（ように感じられる）としても、それはむしろ、機能主義が本来もつ理論的な射程を見極めるのに、好都合なことである、といえるだろう。

形式化によつて、構造=機能理論における機能的論理の組立ての

写す問題点を、分解して論じること、可能になる。以下では、それらを順次、扱って行く。

【記述問題】

いかなる理論もそうであるしかならぬように、構造-機能理論もまた、畢竟そのままを扱うことが出来るわけではなく、畢竟、それを構成する諸要因に分解し、それをいったん所定のコードに即して移しかえ、えられたデータを、説明の対象とする。(明示的でない場合にも、この程度の手続きは、必ず行われているはずである。)

この手続きは、物理学でいえるが決定に相当する、とみなしうるが、われわれはこれを、理論が社会システムを(狭義で)記述する(もしくは、モデル化する)ことである、とっておこう。理論は、自らが説明しようとする事象をなりたたせる諸要因を、あらかじめ、変数ないしモデルといった言及可能な形で、自らの側にとりこめなければならぬはずである。

構造-機能理論の場合に、記述問題は、どのように特殊な形であらうかと考えられるだろうか？ この理論は、対象とする社会現象の観察可能な状態を、煮詰めて、のこらず変数と構造との複合体の形に、うましかえてしまうことにする(それ以外の、記述のための概念は、まったく用意されていない)。そこで、変数とは、社会現象のなかの相対的に変化しやすい要因をとりだすものである、と本準変数とでもよべるかもしれない。それに対して、構造とは、社会現象のなかの相対的に変化しにくい要因をとりだすものである。変数と同じ扱いとして、構造変数とよぶことも出来るだろうが、一般には、(本準)諸変数の相互関係を規定する関数形として記述出来るだろう。構造は、変数とはまた1段次元のちがった、長期的な視野のなかではじめ、変化していくものとしてとらえられる。

N.B. 構造-機能理論が関心をもつような時間的範囲のなかでまったく変化しないような要因は、もともと考慮のうちにもいれられないので、変数としては勿論のこと、構造としても記述される必要がない。構造-機能モデルの外側には、そのように打ちあてられた要因があるにしている。

どのような要因をえらびだして対象を記述するかは、一般に、(論理的整合性などがみだされる限りで)理論の恣意にまかされる、といえるよう。構造-機能理論の場合には、つぎのよう后二つが言えると考えられる。

- (a) いかなる要因を変数としてとりあげ、いかなる要因を構造としてとりあげるかは、理論の恣意である。
- (b) ただし、とりあげた構造は、いづれも、とりあげた変数のいづれかよりも変化しやすい要因であっては、ならない。(要因の全体を、変化しやすさに関して順序づけるとすれば、変数は構造の上界、構造は変数の下界でなければならぬ。)
- (c) 構造は、変数の値を決定するに足るだけ多く、えらばなければならない。(変数は、その構造によって値が決定されるに足るだけ少く、えらばなければならない。)

構造-機能理論が、直接観察可能な社会事象を記述するために用意している枠組みは、ほぼ以上で尽きるだろう。これは、充分に一般的であって、おおよそ考えられるあらゆる事象に適応することができ、一見、何の不都合も困難もないかのようにみえる。

N.B. ここでは方法論上の困難があるかどうかを論じているのであるから、たとえば、社会学的直観を欠くために、変数や構造のえらび方に失敗してしまう、実のある実践的な困難は、おいて捨象して考えている。また、変数が、解緯学、物理学で扱うような実数変数でない(名目変数である)ので、困る、といったいわゆる「変数問題」は、記述の段階で方法論的な困難をも

たらしめなくてはならないので、記述問題には含めない。

構造 X_{f_i} をいかに記述するのでは、問題の生じる可能性が、ないわけでは無い。集合 X_{f_i} を特定できる(記述できる)ためには、i) その要素をすべて列挙するか、ii) $f_i(x) = 0$ を置く変数間の操作 f_i を弄見するか、iii) いずれでもないがならない。ii) は、変数問題により、通常の演算の可能性がないことが、充満をえられるし、かといえ、i) は、記述の能率の点で、不適である。こゝいうわけで、「構造問題」を、記述問題の中心にあえてもいいのだが、むしろいっしょに、つぎのように考えてみよう。

構造=機能理論の記述に、もし不都合があるとすれば、それは、記述のための枠組みがあまりに一般的すぎること、変数と構造とのふたつの概念しか用いていないことにある。たとえば、生化学や生物学を、素粒子論から組立てようとする者がいないのと、同じ意味あいで、適切なサイズの、記述のための概念装置を用いないとすれば、事象を、分析のためのデータと記述する手続きが、膨大なものとなり、ひいては、データの分析そのものも実行不可能となってしまう。

現在の構造=機能分析は、日常人々が自己了解する際に用いるさまざまな策略を、いわば密輸入して用いているから、破綻を来すには至らないが、もし、分析の対象となるほかの水準変数、社会構造を特定していく作業を、直ちに完了するように進めたら、実際、なにひとつ手を下せないに違いない。これは、社会事象を写し取る構造=機能モデルに、単純であるがゆえの欠陥があるせいだ、という疑いを生じさせる。

N.B. <言語>派社会学の立場から言えば、人間の言語事象に記述の目的の中間範疇として、大いに注目され、と主張したいところであるが、こゝは、その場所でない。

しかし、社会事象の記述問題は、それ単独で問題をなすのではな

く、理論の所蔵する分析装置の性能との関連で、問題となる。それゆえ、つぎの、相互連関問題に目をむけてみる必要がある。

N.B. ちなみに、二つの「記述問題」つぎに論じる相互連関問題は、また、構造=機能理論の代替理論として各をあげてみた(理論としての)相互連関分析にも、共通してあてはまる部分が残っており、

【相互連関問題】

相互連関問題とは、どういうことかという、これは、記述された社会的なシステムのなかで、どのような均衡値が実現されるかと、分析する手続き(いわゆる、相互連関分析)にともなう諸問題、である。理論が相互連関分析を採用しているとは、理論が、現象を構成する諸要因が全体的な連関のなかで相互に依存しており、同時決定に服するものである、とみなしていることを、意味している。構造=機能理論は、このような相互連関のありかたを解きほぐすための、充満有効な手法を用意してはいない、ならない。

相互連関分析にかければ、理論経済学の一般均衡理論(General Equilibrium Theory)に一日の長があるので、それがどのようなものであったか、簡単な要約を試みよう。

P. A. Samuelson は、L. Walras が定式化していたような市場の一般均衡モデルを、どのように分析するか工夫をかせね、ほぼこれ以上は望みえない水準にまで完成させた。これによれば、一般均衡理論の論理は、(i) 均衡条件による均衡分析、(ii) 存在定理による存在問題、(iii) 安定条件による安定分析、の3つの契機からなるものとして、つかまれることになる。小室直樹が、しばしば強調するよ

る以上は、当然、その分析に採用されてしかるべきものである。(なせならば、それは、祇然たる論理の問題であるのだから。)

均衡条件とは、変数の相互連関の仕方を特定する制約条件(の全体)である。(これは、 X のなかから、とりうる値 X^*f_i を指定することに等しい。→ 1.23) したがって、均衡条件の实质は、構造記述に等しい。

N.B. 経済理論には構造概念が欠如している、というふうな(は)しは言われることがある。実際人は、そのような印象を受けやすい。しかし、上のように考えてみるなら、構造は、すでに均衡条件の形で与えられている、と言わなければならない。たゞ、経済理論は、相互連関分析だけから構成され、たがだか比較静学のロジックしかもっていないから、構造の变化を理論の内部にとりこんで考えようという着眼が、乏しくなっているのだ。

存在問題は、与えられた構造のもとで、均衡値(均衡条件を満たす、解)が、(一意的に)存在するかどうかを、検討する手続きのことをいう。

N.B. 経済理論では、解が、実世界に均衡条件から算出されるわけではないので、(有意味な)解が存在しない場合を吟味する手続きを、独自につくりだす必要がある。Walras は、素朴にも、方程式の数と未知数の個数とが一致することを以て、解の一意的な存在を仮定(してしまっていた)のであるが、そのうち、不動点定理、介値定理、Frobenius の定理といった諸定理の応用可能性が知られるようになるにつれ、市場の均衡解の存在問題は、はるかに厳密なやりとどいた取扱へと変化するようになった。

ゆえに、さきののべた記述の原則(の)によつて、適当に、変数と構造との配置を格塩することができる——両者の比率を変えることによつて、過剰決定(overdetermination)や、過少決定(underdetermination)を防ぐことができる、というわけだ。(現

に、ある時点で、社会があるあり方かどうかがあっていないという事実を、巧みに記述するといふは、二のうに考えることは、不当ではないともいえる。) たゞ、構造=機能理論が、実効的な存在定理を手に入れるたうとは、いまのところ、まゆめて考えにくい。

安定問題は、均衡値が安定条件を満たしているかどうかを、吟味する。この安定条件には(理論経済学の一般均衡理論の場合、いくとも)主体的安定条件と市場での動学的な安定条件との2種類があつて、その含意は、同一でない。前者(主体的安定条件)は、均衡が最適であるための充分条件をいい、後者(動学的安定条件)は、変数の値が均衡値へと収束するための条件をいうのだ。

*

経済学の場合に、これらの分析概念が大きな力を発揮し、あるいは理論的に重要な位置を占めることができたのは、変数の相互連関の仕方について、適当な情報が、すでにあたえられてあったことによる。たとえば、限界効用逓減(限界代替率逓減)などといった、基本的な指性質が判明である限りで、これらの分析手法は、その力を発揮することができるのである。

ところが、社会システムを記述する(相互連関モデルの形にしてとりだす)といつても、それは果してどのような構造をとりだしてこられるものなのか、全く特定の仕様がなない。(すくなくとも、構造=機能理論のなかには、そのような主張は含まれていない。) その理由は、予算制約式のような便利な線形関係がみつからないから、というように、生易しいものではなく、変数が一般に実数型でない(演算が定義できない)ために、経済学が経済モデルを記述した場合に享受したような好条件を、ひとつも期待できない。ということである。これでは、マクロ変数を算くための、集計という操作も行ないえないのであるから、このような事情が、相互連関分析を試みようとする場合に、まったく致命的であることは、明白であると

いよう。というのは、相互連関分析の諸手法が適用可能であることを、論理として主張する（として、それは正当である）としても、その手法の如刀は、まったく、構造が何か具体的に記述されることを前提としている。そして、構造が、まったく抽象的にしか、つかまえていないようでは、相互連関のありかたについて、何ひとつ分析のはじめようがないのである。分析装置を全く欠いたのでは、モデルは無用の長物でしかない。

しかし、構造=機能理論が、このためにまったく無効であると考えてしまうとしたら、それは早計というものである。構造=機能理論は、社会事象を構成する要因が相互に関連しあっていることを前提し、それを説明する企図をもっている理論である、が、その本性は、直接に相互連関分析を実行しようとするかわりに、機能概念をたて、機能による制約の視点から、いわゆる媒介的に、社会事象を説明しようとするところにあるのだから。記述問題、相互連関問題における困難は、ある意味では、予期されていたものである。そして、機能要件は、社会変数を集計するかわりに理論家が認定したマクロ変数であると、考えられないこともない。

構造=機能理論は、たしかに、相互連関分析としてまったく鍛えられていない。相互連関分析を行うための分析手法の手持ちも、これといって無い。しかし、それは、構造-機能理論が、機能主義的方法をとるものであることに由来する、必然である。それゆえ構造=機能理論の方法とその射程を、概括するためには、さらに、機能要件を仮設することによって、要件問題にまで、わけ入ってみる必要がある。構造=機能理論が、単なる相互連関分析にまっさらな存在で、社会現象を記述・説明できるとすれば、その方法的な優位性と存在理由とが、ある程度は、弁証されたことになるから、である。

N.B. 機能理論とは、また離れたところに、数理的社会研究の1系列がある。これを、数理社会学とよぶのが、Bつうなりかもしれない。

身近な例をあげよう。今田高俊の最近の論文は、ダイアド関数を数学的に定式化したある種のモデル（いわゆる、Richardson-懸架モデル）の安定条件を考察し、そのおのあのの場合の自意を、吟味している（今田【1977】）。小室直樹が言うように、これは、Samuelsonの動学モデルの特殊場合（ $n=2$ の場合）に相当しているだろう。今田の安定条件は、連立微分方程式体系にあらわされた、2者の行為の相互連関様式の、収束条件にほかならないが、これは、Samuelsonの場合と同じく、相互連関分析であることは、明らかである。

今田が、このような相互連関分析の方法および手法を、よいかい、全体社会へと、拡張して適用していく意図をもっているかどうか、私はよく知らない。が、ダイアド関係のような単純な場合ならばともかく、拡張を意図するや、早晩、記述問題および相互連関問題にぶつかることになるに相違ない。そして、それは、数理解析の手段を磨き上げること（のみ）によっては、突破できないだろう。理論は、むしろ、そこからはいると言える。

数理社会学は、数理的方法を用いて、種々の社会事象を説明しようとする。それは、全く結構なことだ。しかし、数学がそのさまざまな社会事象の十分な説明に有効であるとするなら、社会(学)理論は不要となるはずである。数理的方法は、単純簡明な前提を必須とする、（しかし、たとえばダイアド関係の如きが）単純であることと社会事象のなりたちにとって基本的であることとは、同じではない。11の数理解析手法の本陣では、より社会学的な問題を扱おうとするときに、数理解析の有効性は急激に低下してしまう。数理解析が、ばきりした有効性を示すのは、社会の全体的な事象ではなく、社会の局所的な事象にとどまる。（ここで数理解析といっているのは、社会現象の統計解析にちかざる研究系列とは、別のものなので、誤解なまよう）数理社会学が、理論的な関心のみでかかれないで、そこからはずし、数理的方法に特化することによって、他に社して自己の存在理由を主張する方向に万一あきらめはじめるとすれば、それは行詰

りの途である。社会学の困難な状況を拓くのは、教理解析の手
法であるよりは、理論のカであるだろうから。

【要件問題】

機能を鍵概念として社会理論を組立てようとする構造=機能理論
は、あらゆるシステムに、機能要件を仮設しようとする。しかし、
単に、どんなシステムにも機能要件が存在しますとか、要件空間を
考えることにしますとか、言うだけでは、不十分である。社会には
社会の機能要件が、病院には病院の機能要件が、子供には子供の機
能要件が、犬には犬の機能要件がある、というのでは、何も解明し
たことにはならないだろう。そこで、構造=機能理論は、機能要件
とはそもそもどういう概念であるのか、千差万別の社会システムの
機能要件について、一般的に妥当するような命題を、特定して示す
ことができるのか、といった諸点を、明確にしなければならぬ。
ここに、要件空間論と称すべき議論が要請されるのであるが、ここ
には、種々の疑問(要件問題)が未解決のままに積たわっている。
ところが、驚くべきことに、この要件問題に関する議論は、構造=
機能分析派の内部でも、なおざりにされたまま、まだ殆ど手がつけ
られていない。

機能要件をそもそもどのようなものとみなすべきかは、すでに、
構造=機能理論の筈式を示してみいたときに、明らかにしておいた
通りだが、要点を再設しよう。機能要件にとって本質的なこととし
て、それが (i) 社会システムの状態の関数であること、(ii) それ自身、
社会システムの(なんらかの)評価の尺度として、はたらくこと、
(iii) 社会システムの構造にフィードバックすること、の3点があ
る。(これらの点にそぐわない議論をするような構造=機能理論
は、存在しないといえよう) それ以外のことから、たとえば、A
GIL 図式の具体的な内容などは、上にいう機能要件を、さらに特殊な

仮設のなかにもちこんだ場合に、言いうることなのだ。(最近では
AGIL 図式をみとめない構造=機能分析派の人々の方が、むしろ数
多い。

そこで、機能要件の概念について、もう少しまつめて考えてみよう
とすると、上の3点に関連して、(i) 機能要件関数(FR)は、どん
な関数なのか? (ii) 要件空間内部の構造は、どうなっているのか
? (iii) 要件空間は、どのように社会システムの構造に、フィード
バックするのか? といった諸論点をはっきりさせてみなければなら
ないことが、わかる。このうち、(ii) は、のちに、許容問題なら
びに構造変動問題として、別個に論じるので、そちらに譲るとする。
また、(i) の、要件関数に関する議論は、省略しよう。したがって
以下では、(iii) の、要件空間の構造に関する議論を、中心的な主題
とする。

N.B. 構造=機能モデルにおける論理的な順序から言えば、たし
かに、社会システムの均衡状態が定まり、そのあとではじめて、それが要件
空間に写像されて、それに対応する機能がはかられる、といえる。
しかし、理論における構成の順序から言えば、社会システムの状態
の変化の仕方を包括的に把握しることがむずかしいので、とりあえ
ず、その一次近似として、機能要件をたててみる、と言っているのだ
から、まず考えつかれるのが要件空間(の構造)であり、その段階
では、まだ、社会システムの構造や、要件関数のあり方は未知であ
るのだ。

ところで、要件空間の構造を考察するとひと口に言っても、まだ
通説として定まった考察の仕方が出来上がっていないわけでも、何でも
ない。そこで、試論的に、つぎのようないくつかのテーマを考えて
みたい、と思う。まず、① 要件空間の要素のありだには、どのよう
な関係が考えられるであろうか? おそらく、機能が「評価」の一
種としてはたらくことから考えて、ある種の順序関係のようなもの
を、考えなければならぬだろう。これを、機能要件空間の順序関係

題、といおう。さらに、② 要件空間には、一般の機能要件が、いくつか複数個存在すると思えるべきだろうか、それとも、ひとつしか存在しないと云うのが妥当か？ 機能要件が複数個あるとしたら、これらの要件の存在個数を、どのようにして決められるのか？ 一概に、要件が4つあると云えないなら、AGILについて論議することなど、そもそもナンセンスであることに、たがひはない。そこで、機能要件がひとつしかない、と言える条件、等を論じておく必要がある。これを、機能要件空間の要件分離問題、といおう。さてまた、③ 要件の値とモデルの与件とは、あるいは、要件の値と要件の値とは、どのように関連しあっているのだろうか？ これを、機能(要件)連関問題、といおう。さしあたり、これらの問題に及びてみることに、したい。

① 順序問題

要件空間がどのような集合であるかを、考えてみる。

最も単純な場合として、機能要件関数が、1価の実数値関数であるような場合を、考えてみよう。すなわち、

$$(28) \quad FR(x) \subset R^1.$$

この場合には、要件空間は、数直線(の部分)と同じものになり、経済学で、限界効用学派が、経済主体の(基数的)効用関数を考えたのと、ちょうど同じように、構造=機能主義者は、機能要件関数を考えている、ということになる。

要件空間が、数直線(実数)と同じ構造をもっている、と仮定することは、(1) どのようなシステムにも、ただ1つの機能要件を考えればたりる、(2) 機能要件の充足度は、一義的に、実数値として測られる、という仮定を措いていることを、いみする。しかし、これが、きわめて強い仮定で、殆ど妥当(な)ものではないか、と考えられることは、明らかだろう。このように単純な機能要件に関す

る理解は、まず、効用関数が晒されたと同じ批判を、うけねばならない。効用関数は、まずその基数的性格をとり下げて、序数的効用関数に寄与する。ついで、それが存在するための条件を、顕示選好の第2公準ほか、一連の仮定の形で明示していくことで、そうした批判をこえていった。構造=機能理論も、そうした展開を参考として、要件空間をいさなり実数空間とみたてたりする無謀な試みを、採らぬことになろう。

いまのべたのは、(2)の仮定をといえないことであるが、(1)の仮定もまた、一般には、前提ではない。機能要件は、効用と異って、一般にそれが複数個存在すると思えるべきではない点で、理論的な扱いははるかに困難である。素朴に考えれば、これは、要件空間を、 n 次元のユークリッド空間(の部分)のようなものと考えれば、(すなわち、各要件ごとに、「座標」を与えれば、)それで済むことのようにも思われよう、が、こうした仮定が意味をもつためには、要件の充足度のあいだに、「距離」が定義されている必要がある。では、要件空間は、距離空間として、はたまた、ベクトル空間として、仮定されることが出来るか？

この問いを遡って見ると、要件空間が群(group)であると言えるか？ — すなわち、之に、何らかの演算を考えることができて、しかも、それに関して閉じている、と言えるか？ — という問いにまで、辿りつく。そして、一般に、機能要件空間の要素の間に、何らかの「演算」が必ず定義できるだろう、と考えるのの理由もないことに、思いいたる。とすれば、要件空間の構造を定式化するのに、わけわけにむきみのあるような大部分の数学は、(危険な比喩としてしか)使えないことが、判明する。では、わけわけは、要件空間を、どう論じていったらいいのだろうか？

*

機能とは、それが充足されることか。(そのシステムにとっては)好ましく、充足されないことが好ましくないようなもの、である

—このような、素朴な機能論的発想の視角を、尊重するとして。この視角からすると、当該の社会システムは、いろいろの状態にありうるだろうが、そのつど、機能的によりよいかより悪いかということが、判断できる（と考へられている）はずである。すなわち、要件空間の各要素は、相互に比較可能である（場合がある*）。この意味で、要件空間は、どこに向うかの順序関係が定義されているような空間（集合）だ、と考へておく方が、無難だと思ふ。順序すら定義できないような空間では、機能を考へてみたことにはなるまい。

いまの似たことを、すこし厳密に言ってみよう—— R を要件空間、そこでの順序関係を $<$ と記すことにすれば、

- (29) (i) $r_1 < r_2$ である
- (ii) $r_2 < r_1$ である
- (iii) $r_1 < r_2, r_2 < r_1$ のいずれでもない

のうちの、いずれか1つだけが成立する。

N.B. このほか、機能概念の論理的-貫性を保つために、次の条件も必要だろう：

- (30) $r_1 < r_2, r_2 < r_3, \dots, r_{n-1} < r_n$ であるならば、 $r_1 < r_n$ なるは、正しい。

(すなわち、顕示選好の第2公準と、同じ形をしていて、合理性の仮定がある。) (29)や(30)の成立をみとめたいような理論家もあると思うが、その場合には、機能要件の解釈が、きりめてむずかしくなってしまうだろう。

ある空間に定義された順序関係から、どのようにして、一貫した評価体系（序数的効用関数）の存在をみちびくことができるかは、まさに、理論経済学（とりわけ、顕示選好理論）において、詳しく

*) 空間を構成する各要素間の構成要素が相互に比較可能である、とは限らぬので、こゝういふ方がいい。

研究されている。顕示選好 (Revealed Preference) については、さきにその内容を紹介したことがあるので (→ 藤井 [1975] [1976])、ここでは繰り返さず、その議論の帰結を、ひとことでのりておこう。Houthakkerらの証明した結論によれば、顕示選好の第2公準（ほか、2, 3の仮定）が成立するならば、間接非顕示選好とよばれる2項関係 \bar{R}^+ が、財空間（即ち、行動空間、即ち、価値空間） X 上、完全に半順序づけられること、すなわち、 X において完全半順序が存在することは、（序数的）効用関数 $u(x)$ が存在することと同値であること、同じ仮定のもとで、効用関数の凸形性 (convexity) もまた導かれること、であった。

N.B. 効用を、機能論的に解釈すれば、それはひとつの機能要件であるといえる。また、順序に関して言うと、顕示選好論の場合と要件空間論の場合とで、よく似た性質が有りたっているようにも見える。そこで、早とちりをして、顕示選好にもとづいて定義された順序が、効用関数の存在をみちびいたように、要件空間でも、そこで定義される順序から、うまくいけば、単一機能要件の存在が帰結されるのではないかと期待する心も、あるかもしれない。しかし、顕示選好論の内容を機能要件を考へる場合にも、ひきつしにあることはできないであらう。それは、経済行動を考へる場合に前提できた他の諸仮定が、構造=機能モデルではもはや妥当しなくなるからである。たとえば、財空間 X は、実数空間 R の n 次元直積と同じ構造をもつが、要件空間 R は、単なる点集合にすぎない。したがって、効用理論との安易な類推を、ゆいゆいはここで断念せねばならない。

要件空間が、そこでの順序によつて、どのように秩序づけられるか、考へてみよう。まあ、次のことぐらいは、言えようである。

- (31) 要件空間のどの要素をとつても、その要素より好ましい要素、また、好ましくない要素が、ある。

$$\forall r \in R \longrightarrow \exists r_1 / r_2 \succ r, r_2 \in R$$

$$\exists r / r < r, r \in R$$

これから、要件空間からある要素 r をとると、その要素を含む好ましき/好ましくなさの1系列

$$(32) \quad \dots < r_2 < r_1 < r < r_1 < r_2 < \dots$$

を見つけることが、できる。 r の右側にあらわれることのできる R の各要素を、 r の上界、 r の左側にあらわれることのできる R の各要素を、 r の下界とよぶことにしよう。すると、さほどの(30)より、

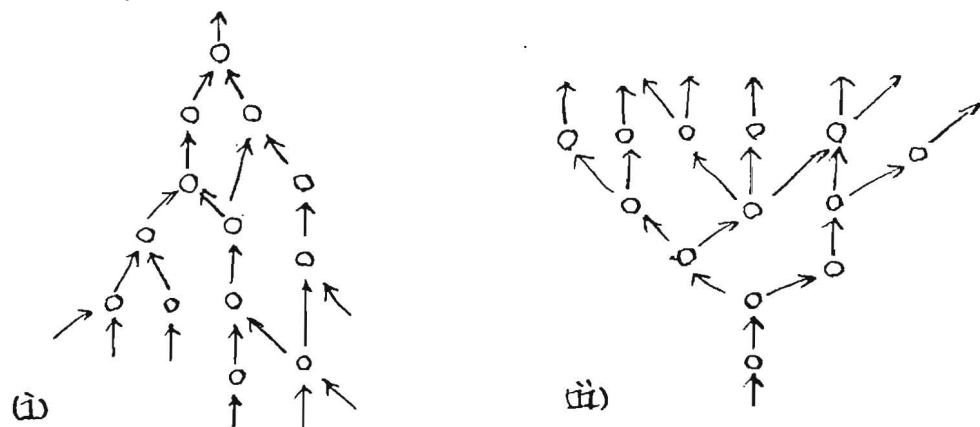
$$(33) \quad \{r \text{の下界}\} \cap \{r \text{の上界}\} = \emptyset$$

である。

上界と下界のあり方に関して、つぎのような場合を、考えることのできるだろう。

- (34) (i) 要件空間のいかなる2要素をとっても、共通の上界を見つけることができる。
- (ii) 要件空間のいかなる2要素をとっても、共通の下界を見つけることができる。

このそれぞれの場合を簡単に模式化してみると、図<35>の(i),(ii)のようになる(矢印の向きは、上界をあらわす)。



図<35>

要件空間に(34)-(i)のような性質があれば、当該のシステムは、「何が好ましくいか」に関して、一致した基準をもっている、と言えるだろう。そして、このシステムが、機能要件の充足度をより高めるような方向へ種値変化をくりかえしていくとすれば、しだいにある構造に接近していく、ということも予想される。

これに対して、要件空間が(ii)のように順序づけられていれば、このシステムは、「何が好ましくないか」について、一致した機能評価を行なっている、といえるよう。そして、この種のシステムが、より好ましい機能の充足状態を求めて構造を変化させていく場合には、はじめ互いに似通った構造をそなえていたとしても、(だいに、たがいにかけはなれた構造をそなえるようになっていくことがある、とも考えられる。

ある要件空間が、上の(i),(ii)の命題を同時に成立させているような場合には、その要件空間は、ある意味で、いっそう一貫した価値体系をそなえている、と言えるかもしれない。(i),(ii)が同時に成立するとき、要件空間は、(線型の尺度とは限らないにせよ)システムに、ただひとつの尺度を与えている、と言えるのである。したがって、この空間は、単一要件空間とみなしうるだけの構造をもっている、と考えるもよい。

むしろ、社会システムは、いくつもの機能要件をもっている、と考えられるので、いまのべたような、(i),(ii)の同時成立を仮定するのは、妥当でない(→2.33)。そこで、一般には、(i),(ii)がともに成立しないような場合を、考えておくのがよいだろう。そのような空間では、機能要件が(存在するとしても、)複数(複数値)存在するのである。

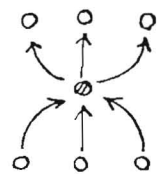
*

機能要件が複数存在するとは、どのような場合に主張できるだろうか？ いろいろ考えてみた末、たとえば、つぎのような条件を留意すべきかもしれない、と提案してみよう。

(36) 要件空間の互換な要素をとっても、その要素に対して、互いに順序づけられていないいくつかともカ箇の上界、いくつかともカ箇の下界を、見出しうる。

$n=3$ の場合を、ある要素 r (図中 \odot) について、図示してみよう (図<37>)。

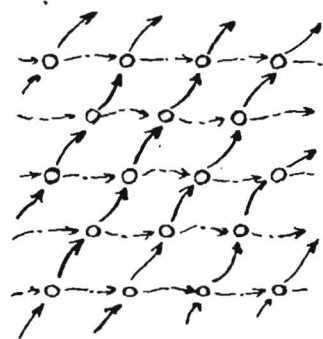
N.B. (31)の命題もさうであつたが、この(36)の条件も、要件空間 R が無限集合であるように、前提している。もしこれが「モデルとして handy でない、などの理由で」不都合であるなら、この条件を、要件空間の大部分の要素について成立つものに、書きかゝればよいだろう。



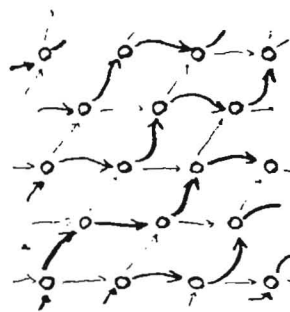
図<37>

要件空間で定義できる順序の連鎖で、互いに交わらないものを、並行 (parallel) であるといひ、並行な連鎖の組みを、軸 (axis) とおもう。

(36) のような条件がみたされているときには、うまくいけば、要件空間 R のなかから、独立な軸を n 本みつけることができるはずである。説明のため、 $n=2$ の場合を、図示しよう (図<37>)。図



(i)

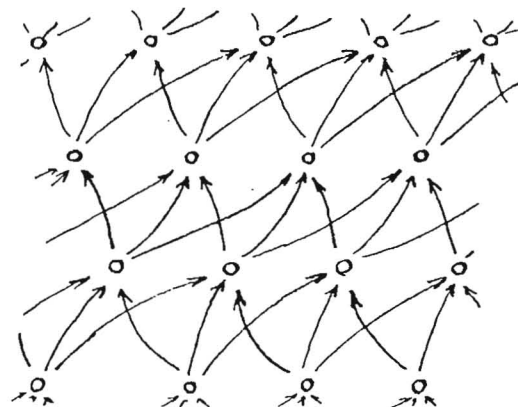


(ii)

図<37>

(i) で、実線の矢印 (\rightarrow) は、1つの軸を、1点鎖線の矢印 (\dashrightarrow) は、もう1つの軸を示す。(ii) では、(i) と同じ順序関係がある場合でも、軸をうまくとらないと、独立なものがないことがあることを、言つておこす。ここで示すような要件空間の順序 (好ましさを) の全体は、2通りの軸上の順序の組み合わせによつて、残りなく記述されるので、この要件空間が、2つの独立な価値尺度によつて合成される (あるいは、2つの従属要件からなる)、と言つてもよいだろう。

軸が独立であるとは、どのようなときか? 明確な定義を下していくので、図で例示しよう (図<38>)。この場合は、(36)の条件にいう $n=3$ の場合に相当し、並行な連鎖の組みが3本みつけれらる。(しかし、この空間の含む順序関係 (のほとんど) は、この3つの軸のうち、2つだけを用いれば、記述できる。あるいは、3通り



図<38>

にという軸のうち、(ある意味で) 1つは、他の2つから独立でない、といえるのだ。

N.B. ここから軸 α を之は、座標の概念を、順序関係の集合に於て拡張しようとする試みである。

(36) の条件を之存之に空間から、実際 n 通りの軸を見出すことができるとは、思はるべきである。そのための条件がどのようなもの

であるか、目下のとおり予想がつかない(和存知の下は、数示ねがいたい)。しかし、その点を予備に付すとして、次の定義が適当かどうか、提案してみたい。

(39) 要件空間に、 n 本の独立な軸が見出しうる時、その要件空間は、 n 要件を含む空間である(n 箇の要件をたてて考えることに、記述的な価値がある)。

(40) n 要件を含む空間の順序が、 n 本の軸の組みあわせによつて、(ほぼ)完全に合成できるとき、その要件空間は、 n 要件空間である。

(39)の定義は、空間にとりうる独立な軸の最大箇数として、 n が定まることを、いふことになる。

N.B. $n=3$ の例に元(たぶん(図<38>)), 軸(要件)の定め方は、定まった順序関係がなくても、つねにひと通りとは限らない。ちよど、 n 次元のバウハウス空間は、無数の基底(vase)の定め方があるように、 n 要件(を含む)空間にも、さまざまな要件の定め方がありうる。

要件空間に n 本の軸を定めることができたとき、軸ごとに、座標に類するものを定め、要件空間を、その n 次の直積空間におきかえることが、可能となるかもしれない。

② 要件分離問題

前項では、要件空間における順序関係が知られた場合に、そこから機能要件の概念を、どのようにして構成できると考えられるか、について、検討を加えてみた。こんどは、ある構造=機能分析家が、 n 箇の機能要件を(たとえば AGIL の 4機能要件を)仮設している場合に、構造=機能理論は、どのような点をどのような手続きに

よって吟味する。その仮設の妥当性をたしかめることができるのか、二、三考えてみたい。

構造=機能分析、当初、Parsons の提出する理論、ならびに彼の言説としてうけとられ、あるいは AGIL 理論と同置された。(そして、今日でもなお、両者を区別しないでしか考えられていいる人々が多い。) (しかしながら、構造=機能分析の論理を厳密にとりだしてみるなら、これは、AGIL理論と直接結びつくものではないことが、理解されるだろう。(現に、吉田氏人や小室直樹のような構造=機能分析の理論家たちは、Parsons を経由しながらも次第にその所説よりも基本的なところで批判的に相対化し、より体系的な一般理論へと再構成しようと、努力をうけているのである。) AGIL 図式は、有名でもあり、批判するにも適当なので、以下ではこれと検討の素材としよう。

AGIL の 4 の機能要件が定義されるような要件空間を、誰かが仮設したとする。まず、この AGIL 4機能要件は、互いに独立であると保証されているかどうか、考えてみよう。この要件空間について順序が知られているなら、先の条件(40)をみたしているかはたまたまと考えられるのは、当然である(しかし、実際には、この作業を実行することは、並大抵の仕事では無理である)が、他に何か言えることがあるだろうか？

小室直樹は、機能代替、機能調整などという概念を提出している。これは、価格理論にいう代替財、調整財からのアナロジーなのであるが、この概念の成立をみとめるかどうかは、重要な論点である。というのは、これは、要件空間を財空間とのアナロジーで捉え(う)るかかどうか、要件空間と財空間とが同型であると仮設あるかどうか、というより基本的な論点と直結するのだから。

経済財の空間では、任意の財は、他の任意の財と、代替可能である。すなわち、各種の手持ち財のうち、ある財の手持ち量が若干減少したとしても、別の財の手持ち量が然るべく増加するならば、はじめと同様の満足水準に復帰できる、と想定されている。(これは

が、どれ程大胆な仮定か、よくよく考えてみてほしい!)。この、取
空間の最も基本的な性質(貝田宗介風に言えば、価値の通約可能性)
は、序数の効用関数の存在によって、保証されているのだ。この
ような性質がなければ、代替、補完も定義できなくなる。(あるい
は、定義できるとしても、経済取の場合を参考にするわけにはいか
なくなる。) ところで、もし、AGIL 4機能要件からなる要件空
間を、ある要件、たとえばAの充足水準の低下が、別の要件の充足
水準の上昇によって補われる、というようなことが一般に考えられ
るとすれば、この4機能空間は、AGIL を各取の名称とするよう
な4取空間と、全く同型になっている、と考えられることになる。
すなわち、A, G, I, L を各要件の充足度とすれば、

$$(4) \quad u = u(A, G, I, L)$$

なる関数——総合的な機能要件の充足度を示すとするの、超機能要
件とでもいうべきもの——が存在している、と仮定することと同等
である。とすれば、機能代替が存在する場合には、機能要件の独立性
は主張しなくなり、AGIL 空間は、単要件空間の場合に帰着す
る。

(したがって、もし、AGIL のそれぞれの、他に考えられる
独自の内容を含めたいのであれば、機能の代替を想定すること
は、不適当である。一般に、機能要件の充足のされ方が異な
る場合は、(自明に一方が他方より好ましい(もしくは、好ましく
ない)場合を除けば) 相互に比較不能だ、と考えなければならぬ。

*

要件が独立であるためには、機能間の代替が存在しないことを、(
効用関数の存在に関する Samuelson-Harthakker の定理の対応を考
えよ) のべた。つぎに、AGIL 図式のような、いわゆる固定要件仮
設について、更なる疑問を立ててみよう——いま、AGIL が独立な
要件だと論証された(あるいは、前提された)として、当該の要件

空間を表現するに、AGIL は一義的であろうか? 例えは、他
に、PQRS のような差要件を考慮することができて、その仮設のも
とで、AGIL 図式と比しても記述・説明力の劣ることのない、P
QRS 図式をたてることのできることは、考えられないのか?

もし、要件空間が、AGIL を基底(基底ベクトル)とするよう
なベクトル空間と同型なものだと考えるなら、上のべたような
ことは、全く可能である。というのは、ベクトル空間の基底のとり
方は全く任意であり、(仮りに互いに直交するものだけに限ったと
しても) 無数の組み合わせが考えられるから、である。とすれば、
AGIL という要件は、全く各目的なものとなり、そのそれぞれの
固有の意味、たとえば、適応、統合、……という、名称や内容や解
釈を配当してゆくことは、意味がないことになるだろう。AGIL
図式に幾分かの記述・説明力があっても、それに替りうる他の理論
を採ることができないなら、AGIL 図式の正しさは、主張しきれ
ないから。しかし、前述のべた理由によって、要件空間をベクト
ル空間とみなすことは、できそうにない。

では、一般に、AGIL 図式と同等な図式が存在する可能性は、あ
るだろうか? すなわち、固定機能要件を仮定することが妥当であ
る(妥当でない)ことの証拠を、構造=機能理論は、みつけること
ができるであろうか? ——この問いは、構造=機能理論にとって、
きつめつききつめ本質的であると思われすが、さしあたり適当な解
決の方法があるとは思われぬ点を、指摘しておこう。(とくにこ
ろか、この問題を論じようとする構造=機能理論家さえも、ほとん
ど存在してない。

N.B. 構造=機能理論の理論としての価値と特質は、それが機能
要件を特定した形で示そうと試みる理論であるところに存する、と
言っている。単に、ある種の抽象空間を仮定するというのではなく、そ

*) ベクトル空間が定義されるには、まず(実数)体が定義されて
いる必要がある。

の知識空間のなりたちを、比較的内容的明きらかなる数の機能要件に
まじり着せさせようとするに、構造=機能理論のうまみがあるはかな
い。人は、機能要件が実際どんなものであるかを知ることによって、社会シ
ステムに属する重要な知識をうることになる。しかし、固定した機能要件が
存在するものや新しいものやらば、構造=機能モデルを
適切に構成することも簡単になる。

構造=機能論者のなかには、AGIL図式を擁護することの本質的
な困難を察知して、固定機能要件仮設の更改を断念し、そのつどそ
のつど、そのときのシステムに適宜機能要件を仮設していかねばい
ではないか、と考える立場の人々も、あるようだ。この立場をとる
ならば、柔軟な対応ができるので、たしかに、AGIL図式のような
破綻をみせることはあるまいが、それと同時に、機能要件をたてる
という理論上の主張も、きわめて無内容なものになっってしまう、と
言わなければならぬだろう。これでは、単に、システムには一般
に機能要件が(いくつもの)ある、と言っているにすぎず、システム
を解析する上で有用となる特定された主張を掲げること、殆ど不
可能であるだろうから。この立場は、もう少し強固な仮設を提出する
のでない限り、もはや理論的な興味の対象とはなりにくい。

③ 機能連関問題

要件問題として、もうひとつのバリエーションは、ならぬことに、
いわゆる機能連関の問題がある。

構造=機能モデルは、機能の概念を制約論的に再構成してつくり
あげたモデルである。すでに重ねてのべたように、要件空間は、社
会(変数)空間からの写像によって、えられるのであるが、それを、
機能要件関数によって、

$$(42) \quad \Gamma = FR(X^0)$$

$$= FR(X_{f_1} \cap X_{f_2} \cap \dots \cap X_{f_n})$$

$$= FR\left(\bigcap_{1 \leq i \leq n} X_{f_i}\right)$$

のように示すことができます。ここで明らかになるように、機能要件の図
 Γ は、まず、④均衡値 X^0 のいかに依存しているといえるのは
もちろんなことであるが、同様に、②要件関数 FR にも、また、③
社会構造 X_{f_i} ($i=1, \dots, n$) にも依存している、と考えられる*)。し
たがって、この構造=機能モデルによれば、当該社会の機能充足の
度合の変化もまた、①均衡値の変化、②要件関数の変化、③社会構
造の変化、のいずれかに由来するものと考えなければならぬこと
になる。 Γ を、小室【1974】に依り、社会システムの全機能とよ
ぶことができるとすれば、 Γ の変化は、社会システムの変化にとも
なづく限界機能とよんでもいいかもしれない。

N.B. 先述のべたように、要件空間が実数体における数学的構造をも
てると考える理由はないので、限界機能のよき、解析的概念を、構
造=機能理論の仮にもちこむことは、本当は、許さぬことである。し
かし、分析論理の手法を、一種の比喩によって表現するために、ここ
ではこれを許容することにしよう。小室も、もちろんな、こうした限定は
おぼえておくべきである。

ある社会システムの機能に变化を惹きかこぶ経路に、いまのべた
①~③の3つを区別すべきだとすれば、限界機能をもまた、いくつ
か種類を区別しておかなければ、ならぬだろう。①は、ある変数
の限界機能、③は、ある構造の限界機能である。それに対して、②
は、いわば自生的な機能(評価)であって、社会システムの状態や

*) システムが確定であるなら、均衡値は、システムの構造に全く依存して定ま
るのであるから、 Γ を規定する要因①と③とは、当然、独立である。しかし、
分析論理としては、両者を区別しておく。

構造の変化とは対応しないので、これを限界機能であるとよばない方がよいかもしれない。(というより、構造=機能理論は、構造=機能モデルによって、社会システムの観察可能な状態と、仮設的な機能要件空間の値とが、確定した関数関係によって連関(あつて)いることを、最大の主張点としていっているのだから、この関数(機能要件関数)が固定してあると考えておかなければ、モデルの分析力のあらかたが損なわれてしまう。*)

N.B. 機能連関分析を論じたりするのに便利なので、社会システムの小室直樹による表現(the Komuro System)を、紹介しよう。まあ社会システムの相互連関は、つぎの均衡方程式体系の形にまとめられたい。

$$(43) \quad \begin{cases} f_1(x_1, x_2, \dots, x_n; d_1, \dots, d_m) = 0 \\ f_2(x_1, x_2, \dots, x_n; d_1, \dots, d_m) = 0 \\ \dots \\ f_n(x_1, x_2, \dots, x_n; d_1, \dots, d_m) = 0 \end{cases}$$

ただし、 x_1, x_2, \dots, x_n は、社会システムを構成する諸変数、 f_1, f_2, \dots, f_n は、相互連関様式を示す関数形、 d_1, \dots, d_m は、構造変化を示すためのパラメータである。この均衡条件(43)から、均衡値、

$$(44) \quad x^0 = (x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0)$$

が決定されることになる。(43)には、つぎの表現形もある。

$$(45) \quad f_i(x_1, x_2, \dots, x_n; d_1, \dots, d_m) = 0 \quad (i=1, n)$$

*) モデルにおいては仮設を固定しておく必要がある。さもないと、現象の後追いはある「あと知恵」と区別がつかない。均衡・許容概念を、ともに非関数的に解する傾向のある若田民人の立場は、この点からしても、方法論的に問題がある、といえよう。

また、 d_1, \dots, d_m を明示した最簡形(the simplest Komuro system)。

$$(46) \quad f_i(x_1, \dots, x_n) = 0 \quad (i=1, n)$$

もあるが、モデルとしては、(46)より(45)と変るところがない。均衡値 x^0 に対応して、要件充足度

$$(47) \quad r = FR(x^0)$$

が定まる。この式によれば、限界機能は、記号的に、 $\frac{\partial r}{\partial x_i}$ (1変数)、 $\frac{\partial r}{\partial x}$ (多変数)、 $\frac{\partial r}{\partial d_j}$ 、 $\frac{\partial r}{\partial d}$ 、 $\frac{\partial r}{\partial f_i}$ 、 $\frac{\partial r}{\partial f}$ (構造変化) として示すことができるだろう。

限界機能の概念を明確に定義しておくことは、機能理論にとって重要なことである。というのは、全機能を知っても、限界機能を知らなければ、個々の要因の、全機能にたいする貢献がどの程度であるのかを、知ることはできないから。そしてまた、限界機能の概念は、システムの動学的な分析にとっても、不可欠のものである。しかしながら、実際には、限界機能がどれほどのものであるかを知ること、きわめて困難なことだ、と言っていいたい。

限界機能の発想を、小室は、一般均衡理論にいう比較静学(Comparative Statics)から、借りている。経済理論で比較静学が有効であったのは、均衡条件を構成する関数の関数形が、マクロ経済学の場合のように大体知られているか、それともミクロ理論の場合のように凸形性論といったきわめて有利な仮定を措くことができるため、存在定理、安定条件、その他の分析概念が、有効にはたらいたからにほかならなかつた。しかるに、いま一々の構造=機能理論では、これらの関数形 $f_i (i=1, n)$ および FR について、向かばかりした知識を仮定できるみこみは、きわめて小さい。(むしろ、それを知りえないとこそ、理論構成が出發してゐる。) これが、第1の困難である。

第2の困難は、(特に α/α , α/α の場合だが) 限界機能の概念が、均衡値からさらに機能要件関数(FR)によって写像された要件空間での概念であることによつて、生ずる。機能要件関数の特定(要件の測定問題)は、効用関数の存在問題をはるかに上回る難問であつて、容易に解決が与えられるとは考えられない。とすることは、どんなに厳密な(限界)機能の概念をたてても、その分析が常識の説明力を超え上回るだけの有効性をもちえないのである。という疑いを生む。

この2重の困難によつて、システムの限界機能について、何か具体的に知ることは、まことにむずかしくなつてゐる、と言ひまをせざるを得ないだろう。

*

つぎに、固定要件の仮設を前提とし、しかも、これらの要件が相互に関連してゐると考える立場では、どのような議論が必要となるかを検討してみよう。

仮定して AGIL 図式を素材とするなら、いま問題となつてゐるのは、あるシステムの機能の値が

$$(48) \quad r = (A, G, I, L)$$

と表現され、しかもここに、

$$(49) \quad \begin{cases} A = A(A, G, I, L) \\ G = G(A, G, I, L) \\ I = I(A, G, I, L) \\ L = L(A, G, I, L) \end{cases}$$

のような、機能要件間の相互連関システムが存在する場合である。すなわち、(49)で示されてゐるのは、各機能要件の値、たとえば、A 機能の充足水準が、それ単独で決定されるわけではなく、他の諸要件の充足水準が至近であるかに依存して定まる、とある仮説である。

Parsons の議論は、形式化し(2)示せば、たしかに、このような、要件間の投入/産出に類する考へ方を合はせるもののように、思ひゆる。

この図式のように、要件空間を機能連関システムとしてモデル化することには、かく、問題があると言ひなすべからぬ。まず、機能要件の充足水準が、(49)で示されるように、まったく各要件間の相互連関関係のみによつて決定されるものとすれば、要件関数は、単なる、4つの要因だけからなる相互連関システムに代らるらないことになる、つまり、社会システムの上にかつ制御空間であるという意義づけを、喪つてしまうことになるだろう。各要件の水準は、相互連関関係(49)で関係形として示(2)ある AGIL) が決定する后ならば、決定され(解け)る(つまり、社会システムの状態をうつしとるといふ余地が、まったくなくなつてしまう。これは、(49)のような形で定式化される変数の体系 AGIL が、機能要件であると主張してみても、その根拠があると言へるのか、深刻に問ひゆることになるだろう。

ところが、上の非難をかわらうとして、各機能の値が、社会システムの状態によつて決定されること、をなゆち、

$$(50) \quad \begin{cases} A = FR_A(x^0) = FR_A(x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0) \\ G = FR_G(x^0) = FR_G(x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0) \\ I = FR_I(x^0) = FR_I(x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0) \\ L = FR_L(x^0) = FR_L(x_1^0, x_2^0, \dots, x_n^0) \end{cases}$$

なる関係を仮設するとしても、問題が片づくわけではない。(50)を前提すれば、(49)のような相互関係は、外見上のものであることになる。実際、

$$(51) \quad \begin{aligned} A &= A(A, G, I, L) && (51) \\ &= A(FR_A(x^0), FR_G(x^0), FR_I(x^0), FR_L(x^0)) && (52) \\ &= FR_A(x^0) && (53) \end{aligned}$$

なる関係があることが言え、G. I. L. についても同様である。ここからただちに明らかとなることであるが、(49)を許さぬるとき相互関係は、一種媒介変数間の関係であって、要件相互の連関は、基本的には、社会システムにおける諸変数相互の連関にまったく依存してあり、単にそれを要件空間に反映しただけのものに、おきない。

さて、(49)のよき点、要件間の連関関係をとりだして示すことの意味があるのは、どのような場合か？ それは、(1) (50)の関数形が未知であり、にもかかわらず (49)の関数形が既知である場合に限られるだろう。機能要件(の値)は、もともと直接観察可能でないから、(49)のようなモデルを適当に理論家が構成してみることも許されるかもしれない。しかし、そのモデルの、仮設としての妥当性が主張(ないし検討)されるためには、(50)の関数形が特定されていく(機能要件の測定問題が解決される)必要がある。ところが、機能要件の測定問題が解決してしまうことは、(49)が(51)の形に1つしてしまうことであって、(49)の形の、暫定的な連関様式のモデルの存在理由そのものがなくなってしまうだろう。——以上の理由によって、(50)を前提にした場合には、(49)のモデルは有効性というものであることになり、理論上興味あるモデルだとは、なかなか言い難いのである。

N.B. 小室は、(49)の機能連関図式が、W. Leontiefの産業連関論にいう、投入産出マトリックスと同型である点を、再三にわたって強調している。(49)が相互連関図式である以上、(細かな相違を無視すれば)両者が似ているという指摘は、まことに当然であると言えなくもないだろう。しかし、ゆいゆいは、同時に、わたしの点に目を配ってかくのむなしいは、小室のこの指摘を積極的たうHとめることができないうたである。それは、まがオムに、要件空間の議論を、投入産出分析のような相互連関分析の議論ととらえにありつきまては、まておいか、という疑問点。構造=機能理論は、もともと

相互連関モデルとは別なものと2 構造機能モデルを提出するものであるはずであって、この点をは定しようとするに、11本のた(49)と(50)とのわたのシステムをめぐり問題が生じてくる。(この点は、もとあここで、Parsonsのdilemmaの項で再説している)

第2に目を配りたい点は、(49)の図式と投入産出モデルとが似ている点と同時に、似ている点も視野に収めずあかたけいは比較による利点を見失うことになる、という点。Leontief Matrixが経済システムの分析枠組みとしてきゆめ2有効であるのは、①行列の各要素が測定可能である(操作的なモデルである)、②線型モデルであつても、現実妥当性が高い、③ Hawkins-Simonの条件、正行列に関するFrobeniusの定理、…… などのさまざまな分析装置が、充分に開発されている、といった諸点によるのである。ところがAGILの投入産出図式は、二いふを全くみだしてないばかりか、そのも(何か特定の工を(ない限り)要件間の演算可能性すら存在しない、(すなわち、行列(matrix)であるための要件を欠いている) 二のようなHで、(49)の図式は、Leontief Matrixが享受したような利点に恵まれていることかできないゆへに、吾輩(2 (49)のおなモデルを仮設するだけの理由をみつけることが出来るかどうか、疑問しい、と言えよう。

限界機能の概念は、理論が機能論理を用いる以上、どうしても用いなければならぬ分析概念であるといえよう。しかしながら、この概念が、構造=機能モデルにおいて、十分な分析能力を発揮することは、(ここまでのわた、さまざまの理由によって) 当然のありだのぞめようにない。

【 許容問題 】

許容の概念を、均衡の概念とは区別された別個の概念として、構造=機能分析に導入し、そのなかに位置づけたのは、吉田民人の貢

献である。許容概念を併せもつことにより、構造=機能分析の内容が一般と豊かになったことは、疑いない。

しかしながら、許容、均衡の概念相互の異同や互いの関係をめぐっては、吉田、小室ら、構造=機能分析派の理論家相互に、もう十ほろかたにもわたる論争があり、いまなお結着がつかないままにいらぬ。この、いわゆる許容/均衡論争に関しては、私の見解はあくまで小室の見解に近いのであるが、どう考へる理由等、細かな点については、省略するとし、以下では、私の結論だけを、ざらめて大まかみにのべておくにとどめる。

いったい、均衡概念と許容概念とを独立に立てようとするのであれば、両者が互いにいかなる分析用具であるのかを、明示してからなすべからぬ。私のみるところ、均衡概念は、相互連関分析の水準にあると考え、均衡条件を分析するところに成り立つ概念であると解釈しておくのが、適当であろう。それに対し、許容概念は、要件分析の水準にあると考え、均衡値(が要件空間に確定する値)が許容条件をみたすか否かを分析(許容分析)するところに成り立つ概念である、と解する方が適切であると言えらるべきだ。

N.B. 小室は、ある時期、均衡を点概念、許容を、それに対する、範囲概念(すなわち、範囲均衡なる概念)と考へていたようであるが、点/範囲の対比は、上のふに考へた均衡/許容の対比と、何の関係もないと言ひつねらるべきだ。もし、均衡/許容の対比を、このように解するなら、両者が別個の分析概念であるという主張も、まったく見えてくさす。

要件空間のうち、許容条件をみたすような部分集合を、許容域と名づけることにしよう。その補集合が、非許容域である。構造=機能モデルにおいて許容概念が有効であるためには、許容域においてある命題が妥当(、非許容域においてはその命題が妥当しない)別の命題が妥当する)という仮説を、主張するのでなければならぬ。吉田の発見した許容概念を、構造=機能理論の論理のなか

に組み込こんでおくと、それは、構造変動仮説と結びつけるのでもない限り、あつさりとした解釈のつかないものであることが明瞭となる。すなわち、非許容域は、構造変動を生起させる領域であり、それに対して許容域は、構造変動を生起させない領域であるのだ。

N.B. 均衡・許容の理論的取扱いについては、今日なにかつかの議論が活発しているが、ここでの定式化は、つかのよう解釈をとることを、留意している。

T. Parsons は、均衡概念を自らの理論の中核にあてたが、それがひとつの条件であること、そして、それが条件であるかということも、明瞭に自覚しなかつた点で、多くの混乱と批判とをまねくもととなった。そしてこの点で、許容概念は均衡から分離していない。小室直樹は一般均衡論の概念装置にもとづいて、均衡概念を、相互連関システムの均衡条件の形で明示した。一方吉田氏は、主体均衡を分析する上で(主体の極大)均衡とは区別される許容概念の分析的重要性を主張するにこたへず、議論を大きく前進させた。ところが、吉田の場合、均衡概念が、なおあいまいであり均衡と許容との関連も明確でない。吉田自身は自らの議論が混乱していると思えていた"ところが、たとえば、システムの「状態循環」をめぐり記述(吉田【1974】)をみても、両者が分析概念として分離されていぬのは明かである。均衡/許容概念を、構造=機能理論と接合する途は、非許容域を、構造変動関数の定義域と解するところにかゝり、見出さなければならぬ。

許容/非許容は、いまのべたように規定できたとしても、それだけでは、許容概念が、構造=機能理論のなかで、有効な分析的威力を発揮することには、ならない。構造変動をめぐり問題は、次第で解するが、ここでは、そのまゝに、許容条件 $R(r) \geq 0$ を、どうやうに定式化できるのかについて、考へてみよう。

許容/非許容という状態がたしかに存する、と言へるには、心理的な満足状態を前提として拡張していくというような仕方ではだめで、許容/非許容に応じて別々の結果が生ずることが知らなければ

ればならない。そこで、想定(仮機能(の値))に関して、許容域と非許容域とも知るうとすれば、(一方は機能の測定問題を片附けながら)構造変動が生じるか生じなかつたかを、11る11るの場合に関して、しらべる必要が出てくる。要件が、直接観察可能でなかつた以上は、どうかんばつてみても、要件間の制約条件である許容条件もまた、直接知るすべはないのだから、せいぜい観察可能であるのは、そのときどきの社会システムの状態(拘束値)と、結果生起する構造変動とである。これらの一般化から、許容条件をみちびきだすのは、容易なことではない。そこで、どういうことになるか? うっかりすると(というより、現状では、殆どどうなるしかないのであるが)、許容という概念は、事前的に条件を与える概念であるはお存のに、現象に事後的な解釈を与えるだけの概念に、容易になり下つてしまう、すなわち、構造が変化したのだから、許容状態ではなかつたのだらう、構造が変化しなかつたから、許容状態だったのだらう、という具合に――。

許容概念は、単にたえられてあるだけの段階なので、理論を経験的に構成しようとするや否や、このような素朴な reasoning と結びつくしかない。そこから抜け出す手掛り、すなわち、構造=機能モデルにおいて許容条件を分析的に説明するための有効な手帳まで、許容概念が手に入るのは、はなはだ容易でない。

【構造変動問題】

構造=機能理論の、最後の論理的なステップを構成する仮設として、いわゆる構造変動仮設があることを、さきにゆいゆいは指摘しておいた。この仮設を特定化しておかなければ、構造=機能理論は完結しない。

構造=機能分析にとって、社会構造がどのような場合にどう変動するのかに關する、社会構造の変動仮設をきかえておくことが、

本質的である。というのは、なぜある社会が(相対的に固定的な)ある特定の型の社会構造をきかえておけるのか、という問いに對して、機能理論は、その構造が、機能要件を充足するからだ、とこたえることをねらつておけるからであり、時おり生起する(社会)構造の変動もまた、機能要件の不充足を理由として説明することをねらつておけるのであるから。そのようにして、構造=機能理論には、本来、特定の構造のもとでの社会の状態の推移だけではなく、社会構造とれ自体の一連の推移をもまた、自らの分析の射程のなかにとりこまうとする(すなわち、単なる相互連関分析の射程をのりこえて、構造変動分析へまでもすすもうとする)意図が、その根本のところまで働いておけるのである。前項ごのべたように、相互連関分析から構造変動分析への論理的移行点に、許容条件が位置しておけるのであるが、この許容条件とは、構造変動が生起するための条件である(と解すべきである、というのが私の見解である)。

このように、構造変動仮説のさいめ重要なポイントを占めておけることは、明白であるにもかゝらず、構造=機能分析派は、構造変動にかゝる命題を組み立てる作業を、ほとんどすすめてこなかった。それは、たとえば Parsons が、根拠もないままに、“機能要件は必ず充足される”と考えてしまつて、構造変動を自ら理論の視角の外へと追いやつてしまふ傾向にあつたことも一因であるうし、そうでなくても、“構造は、機能を(より)充足させる方向へ(おのづか)変化する”と、暗黙のうち、素朴な仮定を指してしまつておける場合が多いことも、別の一因であるうし。しかし、私が提示した論点は、こうした偶然的な事情にかゝるものではない。そうではなくて、構造変動仮設を特定化すること(すなわち、機能要件がどうしても充足されなくなつたときに、既存の構造のどこがどのように変化するのかを、はっきり示すこと)は、構造=機能理論にとって不可避な作業であるにもかゝらず、その実行が事実上不可能であること、このことである。なぜならば、特定の構造変動とは、ある構造から別のある構造への移行だと言へるだらうか、事前に、

構造変動がいかに生じるであろうかについて、理論が向か発言（よ）といは、当面考えらるるあらゆる構造がどのような構造へと変動するかについて、（仮設的にではあれ）一応の知識をもっているのをはげめなければならないから、である。

構造変動は、構造から構造への写像(mapping)として、記述するのがよいだろう。構造変動について仮設をもうけるときは、したがって、構造をその領域(定義域)とし、同時にその値域とするような、自己への写像の形を決めることである。問題は、このために必要とされる知識の量が、あまりにも多すぎることにある——たとえば、いま、考察の対象となる変数の個数を n とすれば、社会の状態を表現するために必要な、 n 変数を含む変数空間は、 X (→ 1.22)。考えらるる、ありとある構造の種類は、 2^X (→ 1.23)、社会構造 H の種類(互いに異なる均衡条件の総数)は、 $2^X \cdot C_n$ 。したがって、考えらるるあらゆる構造変動を記述するには、 $(2^X \cdot C_n)^2$ という、気の遠くなるほど大量の情報を使用しなければならない。これは、記述の能率という点から考えて、はたはた具合が悪いことだと言わなければならない。

N.B. もちろん、 n 値の変数を含む空間 X を考えたからといって、そこで可能な 2^X 箇の構造すべてを考慮に入れるなければならない、というわけではない。そこには、自明にも構造となり難いもの(つまり、いかなる社会の均衡条件としてもちょっと採用されにくいような)組みあわせが、相当は入り込んでいるだろう。といは、構造や構造変動の記述も、ここで考えればたはた繁雑でないかもしれない。しかし、それら無用の構造を記述から排除するためには、その根拠を不十分記述的努力が別途に必要であり、つまり、ところ、「非構造」を抽出する努力は、B.F.F. の「構造」を抽出する努力(すなわち、記述問題)に、つきあたることになる。

もちろん、上のような試置は、数字その自身に意味があるのではなくて、(後述する Parsons の dilemma にも関係するが) 徹底的な構造変動分析が、徹底的な相互連関分析に比してさへも、桁違いに大

変な作業であることを示す点に、意味がある。機能という仮設構体系を設定した趣旨は、社会状態の記述を簡約にするためであったのだが、ここでみるように、構造変動の記述がたまたまようもなく複雑なものとなってしまふのでは、当初の目的を達するのには必ずかたがと云わなければならないから。

*

構造変動仮設に関する論理的アポリアは、今のバタのとはまた別に、次のようにも指摘することができよう。

いま、構造=機能理論が、所与の構造=機能モデルに関して、構造変動仮設を完全に特定したところを、考えてみよう。すると、どのようなことが生じてくるか？ 構造変動の生い方があまり知られてしまつたら、結局のところ、構造=機能理論を特徴づけるはずの構造変動分析の論理は、相互連関分析の論理に、あまり吸収されてしまふことになりかねない。ある均衡値が許容域におちないことが知られるや、どのような構造変動が生じどのような新均衡値がえられるか、……が「つぎつぎ」と知られていく、そして、都合どのような経路を経て、システムが許容状態に至るのかもまた、知られることになるだろう。そして、均衡値がいったん許容域におちたとすると、もはやいかなる構造変動の生じる余地も、(論理的に言へば) 排除されてしまふことになる*)。構造変動仮設は、当初、理論を動学化するために導入されたものなめかもしないが、それが完全に特定してしまつと、理論に動学的な契機を与えることができなくなつてしまふ。構造=機能モデルといえども、(機能要件変数を、媒介変数として含んでいふ、という相違を別とすれば) 相互連関モデルと、何ら異るとはならないのだ。

*) 許容域とは、構造変動関数に即して言えば、その領域のうち構造変動を生じない部分、すなわち、構造変動関数における不動点全体の集合である、と考へるだろう。

N.B. いったん許容状態と機能評価された社会システムが、再び動的な過程をたどらば、いめるところを考えるとすれば、構造=機能理論の枠組みでは、つぎのような想定によるしかない、すなわち、①許容条件が変化あり（許容域であったところから、許容域ではなくなる）**）②機能要件関数が変化あり***）。しかしながら、構造=機能理論の分析装置には、もはやこのような事態を扱う論理はのこされていないのである。構造=機能モデルは、そのいらいが不変であることを前提に、構成されているのだから。それゆえ、①②は、外生的な変化としての扱いをうけることになる。

（おそらく、どの理論もそうであるしかたに）構造=機能理論は、このような形で、究極的な動因と、外生的な変化の形で、そのいらいを扱おうとすることは、たぶん、そのいらいで、構造変動一般を考察する「完全理論」は、存在不可能であるはずだ。

以上にも述べたような、構造変動仮説をめぐる困難の2側面——すなわち、一方では、仮説を表現することがともとも困難であり、またその半面、仮りに仮説を提出することに成功したとしても、構造=機能理論が、結局のところ、相互連関分析を上回るだけの説明力を手にしたとは言えようには、ないこと——は、それだけで、いったい構造=機能理論がシステムの構造変動を的確に記述し分析する能力を有しているかどうか、わけのいいに深刻な疑念を抱かせるに十分な材料である。

私のみるところ、この困難は、構造=機能理論が、相互連関分析の論理と構造変動分析の論理との双方に立脚しようとするところに由来するものだ。しかし、このふたつの異なる論理は、なかなかひ

**）この結果、当然、構造変動関数（の一部）も、形が、変化することになる。

***）この場合、許容条件や構造変動関数は、かならずしも、変化するとは限らないだ

とつたとけあつてくれそうもない。構造=機能分析が、いまだに十分な構造変動仮説を提出できなれているのも、つまるところここに原因があると言える。社会システム一般の構造変動の原理を、一般に適用できるとり扱うような理論が成立可能かどうか、私はさしあぐ疑問に思うが、かりに、構造=機能理論（のひとつ）が、そのための仮説体系を提出しようとするにしろ、その前に、ここでの述べた構造変動問題と適切に処理してやるのでない限り、成功は望まれない。そして、構造変動を扱えないようでは、構造=機能理論の存在価値自体を、早晚問われざるをえなくなる。

【複合問題】

最後にとりあげなければならぬ問題は、システムが複合的であることに由来して生じる困難である。この複合問題は、まだ殆ど論じられていない上、ここまでの述べた諸困難と匹敵するだけの困難を抱えていると言えよう。

構造=機能理論によれば、いかなる社会現象、いかなる社会システムの挙動といえども、それは必ず、構造をともなつた諸変数の値の変動、それにともなつて定まる機能要件（変数）の値、機能要件によつて「制御」されている構造変動、のつとを契機としているような、構造=機能モデルの枠組みによって、妥当に記述できると主張されていた。ところが、いかなるところに社会システムが存在するとも定め、そこに構造=機能モデルを設定するかは、本来、理論家の恣意に属する。構造=機能理論が一般的な妥当性をもつ、と主張しようと思えば、全体社会システムはもちろんのこと、その構成部分である諸々の下位システムにもまた、この分析枠を適用してやるのでなければならぬだろう。さもないと、機能概念の分析的有用性が局限されていくと、理論自らがみとめてしまったことになり、その理論はもはや「機能主義」的ではなくなる。

ところで、自明に与えられるように、社会システムは決して力学系のような1枚岩的なものではなく、その諸要素が相対的な独自性をもつ動くような、内に矛盾を孕んだあり方をしていて*

社会理論家たちを永らく悩ませてきた問題は、社会と個人と、そのいずれがより実在的であるか、であった。しかし、社会もまた個人(個体)も、他方より、より実在的であるなどという扱いは、できはしない。この論点を、機能論の枠組みのなかにつづして煮つめると、つぎのように言えるだろう——全体社会のシステムは、機能的なシステムであるが、同様に、全体社会を構成するさまざまな下位システム、諸個体もまた、機能的なシステムである。よって要するは、いずれも、構造=機能モデルによって論じられるのでなければならぬ、と。

ここから、つぎのような問題が生じてくるほかである。亦存りち、一般に、上位社会システムと下位社会システムとの関係は、どうなっているのか? (あるいは、全体社会と、集団、諸個人の関係は、どうなっているのか?)

この問題がむずかしいのは、構造=機能理論が、一般均衡理論の場合のような単なる相互連関システムではなく、機能要件による判別の区ごごごのような、機能的なシステムとして、自らのモデルをこてしているから、である。ここに、実際の重層にもとなく困難が、生じてくる。(実際、これは、集約問題の程度をばるかにとびだした困難である、と言えよう。)

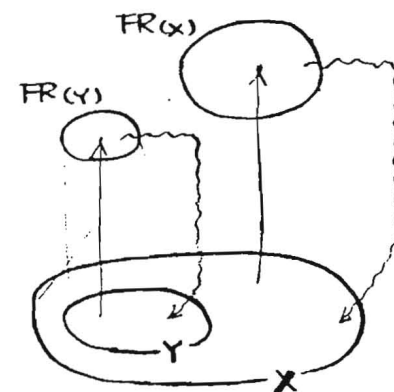
*

わかりやすく説明する反めに、何が具体的に例をひこう——日本兵が、南京で、非戦闘員である中国人を殺害した、という事実があったとき、これをどのように扱おうか? この行為は、一方で、

* この矛盾を扱えないのは、社会理論として未格であると意地を付けなければならない。

国家と国家とのあいだの戦争を前提とし、戦争目的を遂行するための指令にもとづく戦闘行為として考えられると同時に、また一方で、兵士(個体)のパーソナリティ・システムの緊張や葛藤から、残虐行為を説明しようという善眼もできるかもしれない。つまり、この事実は、全体社会システムの枠組みでも、個体(システム)の枠組みからも、とらえられるのである。しかし、このふたつの枠組みが、つねに同一の帰結をみちびくとは限らない——人間は自由だから、命令されてもさからったり、命令されないことでもやめてしまったり、するのだから。

この例示によっていいたかったことを、もっと一般的な形式のバてみよう。いま社会変数のシステム X があり、その真部分集合からなる下位システム Y ($Y \subset X$) があつたとする。構造=機能理論の基本仮説によつて、システム X , Y に対して、機能要件空間 $FR(X)$, $FR(Y)$ があつて、おのおの、 X , Y の構造を判別している(フィードバックしている。)問題は、このふたつの判別ルーの關係がどうなっているか、にある。別段ことわりがない限り、 $FR(X)$ と $FR(Y)$ との關係は、何も明らかではない。(したがって、たとえば、下位システムが Y^0 なる状態にあつて、許容条件をみたしているとき、上位システムが X^0 ($\supset Y^0$) なる状態を許容条件をみたさない場合(とよそのまた別の場合)が、当然生じてくるだろう。そのようなとき、果たして、下位システム Y にかかゆる構造変動は、生じるのか生じないのか? ——機能要件による構造への判別が交錯する二つのような場合を(一般的に)定式化することが、きつめな困難であることは、容易に察せられる通りである。全体社会は、さまざまな機



図(52)

能要件による構造への判別が交錯する二つのような場合を(一般的に)定式化することが、きつめな困難であることは、容易に察せられる通りである。全体社会は、さまざまな機

能的システムの複合体としてつかまわれるだろうが、制御の重複ないし交錯をとりまわす論理を手にいれない限り、分析概念として機能(要件)を設定することの能力は、発揮されないだろう。

複合問題の核心は、制御の重複(もう少し詳しくいうと、被制御空間と複数の制御空間が共有すること)に由来する。論理的な困難にある。制御は、ある特定の状態を実現(しようと)するはたらきであるが、裏からみればそれは同時に、それ以外の状態が実現することを排除(しようと)するはたらきでもある。制御は、自らの作用以外の、他の作用を、雑音(noise)として斥ける(ことができる)限りにおいて、制御たりえているのである。したがって、同一ではない状態を実現しようとするふたつの異なる制御がかかっているモデルを考えるとしたなら、それらは互いに他の作用を雑音として排除しよう結果、少くともその一方は、制御の名でよぶに値しないものでしかなくなることだろう。

このように、制御が重複ないし交錯するようなモデルを考えるのは、むずかしい。また、かりに考えてみたとしても、制御能が他の制御によって限定されてしまうなら、機能による制御という概念装置をたてても、経験的事実との関連性がいよいよ薄くなって(まて、構造=機能モデルの実効性が失われる)しまう。それでも、どうしても制御が重複する複合的なモデルを構成しようというのであれば、あらかじめ、それだけの機能要件空間の制御能を(仮設的にであれ)確定してみるのになければならないが、その作業は、実質上、もはや絶望的と言うしかないほどに、困難である。実際、構造=機能分析派の内部でも、複合問題に関する具体的な実効的な提案は、殆ど行なわれていない。と言っている。

N.B. ただし、ごく素朴な形でなら、複合問題も構造=機能主義者によって論じられていないこともない。

たとえば、吉田良人は、要素主体に均衡(主体均衡)を定義しておいた上で、それら主体からなる社会(全体集合)に関して、Pareto 最適に

よる均衡を考え、これをその社会の均衡と定義しよう。と提案する。そしてまた、同様に、各要素主体に許容を定義しておき、その上でそれら主体の全体に対して、Simon 許容なる概念により、許容を定義しよう。と提案している。なるほど、このように考えようとすれば、下位システムと上位システムとの間に、ある種の関連がつくことはつく。だがしかし、均衡に関して言えば、均衡概念が相互関係分析の論理から切りはなされてしまう結果、曖昧な概念でしかなくなってしまっている*)し、許容に関して言えば、均衡および構造変動仮説との関連がまったくありまじいまま、一種の満足度の加算ものとして、均衡の球と同様に主観的な概念としてとらえられてしまっている。このように、あいまいで分析力のない概念をたてておけば、明瞭な前提を見せずにすみかゆりに、本論での似たような種々の困難に気づくのもおもしろいだろう。

また、Parsons は、上位システムの各機能要件を分担するような下位システムが、実体的に分化してくる、という仮説(Parsons のシステム分化の仮説)をたてることにおいて、上位システムの要件と下位システムとの関連について、ある言明を行っている。とも考えられる。(Parsons が、この仮説とともに、要件をAGIL 図式の形で固定させて考えていることの当否、および、この仮説の内容自体の経験的な妥当性(きりめて疑わしい)の当否を、一応不問に付すとしても。)この仮説が、構造=機能理論の一般的仮説として採用されるとすれば、つまりのような、論理的な困難が生じてくるであろう、すなわち、①下位システムは、さらにまたつまり"階次"の下位システムに分

*) 吉田は「均衡」という用語のもとに、主として主体均衡をイメージしたうえで、これを最適均衡であると解釈し、さらにそこからおきんで、複主体状況下での Pareto 最適も、最適値=均衡値である点は同様だと言っているから、Pareto 最適によって上位システムの均衡を定義すればいい、と考えている(らしい)。しかし、これは、(i) 均衡概念を主観主義的に解釈するという踏み出しを行って、(ii) 上位システムで(相互関係の論理により)決定される均衡値と、Pareto 最適との関係をつけている、という点で、はなはだ満足おぼからざるものである。

化していくものとするなら、際限がないか？ その反はどうなるのか？（もし、中断しているのなら、それはなぜか？） ② たとえばA要件を担うA下位システムの、そのまたG要件を担う下位システムの機能要件は、単に、神然たるAGIL要件の1つなのかと考えると知るべきなのか？（一般に、特定の要件を担うべく特定のシステムが存在しているという主張を、どうやって検証するのか？）……。これは、結局、要件分離問題につながるのだが、Parsonsのシステム分位の仮説が強引であるという事情は、くっかえらなれと思う。

113113 考えてみても、構造=機能理論の枠内で、複合問題に対処する仕方には、なかなか思いついたらない。ここからも、構造=機能理論の論理構成が、一般的妥当性をもつものの理論内容としては不相当であることが、推しはかれると思う。

Parsons の dilemma

前節では、構造=機能理論が、社会システムの構造=機能モデルを据えてみるとしても、それが本来知られていた分析的な力量を發揮するまでには、（現在なお解決のむずかしい）どれほど数多くの困難が控えているのかを、概括的に、列挙してみた。これは、一見したところ、あれこれの分析的スラッシュにあらわされる個別的な論理的難関であり、それ故、今後の分析手法の発達いかんによつては、充分突破する可能性のあるもののように、思われるかもしれない。（かく、私のみるところでは、これはむしろ全体としてひとつの問題複合をなしており、ある部分的な問題の解決は別の問題の解決をかえって困難にするという具合に、一種のジレンマを構成している、だから、ともとも打開の途が鎖されている、というふうにある

のである。

このジレンマが、構造=機能理論に本質的に根ざりような難点であるならば、構造=機能主義に、社会理論としての昇格はない、と言わねばならないことになる。一般理論としての構造=機能理論の行き詰まりは、すでに、一部の人々のあいだでは、論議されはじめているのであるが、ここで、なぜ、構造=機能理論が本来ジレンマを抱えていると考えられるのか、をまとめてみよう。

*

まず、ゆいゆいは、Parsonsが、自らの考案した構造=機能分析を、改善の理論体系である、と位置づけられたことを、思いおこしておく方がよいだろう。Parsonsは、1955年の論文のなかで、凡そあらゆる科学が目指すべき理想像として、解析力学の理論体系をあげている。しかし、社会科学の現状では、到底そのような徹底的に形式化された体系的な理論を提示することは、望むべくもないので、その替りに、構造=機能分析の枠組みを提出する、という方策を採用したのだ、という。ここから明らかなのは、Parsonsの把握によれば、構造=機能分析とは、①本来、相互連関分析によって完全にとってかわられるはずのものであり、②本格的な相互連関分析を実行するに足るだけの知識や手掛りがえられない場合に限り、組み立てられる理論だ、ということになることだ。

このようなParsonsの考えは、妥当なものであるか？

もし、Parsonsの見解が正しいとするならば、構造=機能理論は、それが構造=機能モデルにのみ依拠するものである限り、いつまでたっても、そのどっちつかずの性格を免れないことになる。すなわち、構造=機能理論は、その論理構造を厳密に形式化しどこまでもつきつめていくならば、いつのまにか相互連関分析に行きついてしまう（構造=機能理論ではなくなってしまう）ほかはなく、また一方、そのような作業を怠るならば、対象分析力を欠いた飾りものの理論にとどまるしかないことになる——つまり、有効な社会

理論としての構造=機能理論というものは、本来ありえないことになる、と言うしかなくなる。これを、Parsonsの dilemma, とよぼう。

**

Parsonsの dilemma について理解するには、構造=機能分析についての、小室直樹の見解が、大いに参考になるはずである。

小室は、Parsonsの悲観的な見解の一半を、Parsonsが社会科学の趨勢について無知であったことに、帰せしめる。なぜなら、Parsonsが「改善の策」として構造=機能分析の理論をあみだすのに腐心していたちやうどその頃、Parsonsの研究室の目と鼻の先で、相互連関分析を縦横に駆使した社会科学の体系構成がなされていたのだから。新古典派による一般均衡理論の再構成（とくに、P. A. Samuelsonによる動学的分析の定式化）が、これである。といゆえ、Parsonsは、改善の策としてこの構造=機能分析に甘んぜずとも、もっと大胆に相互連関分析にたづなうことができたはずだ、と小室はみる。

小室直樹に代表されるようなタイプの構造=機能分析派の仕事と、ひと口で言いあらわすことができ、それは、一般均衡理論によってできる限り構造=機能分析を再構成することだ、と書いていっている。そのために、小室は、まず、構造=機能分析の枠組みのなかに、均衡条件、存在定理、安定条件という、一般均衡理論の3つの主要な分析概念を導入しようとはかる。また、「限界革命」との並行関係において、全機能/限界機能の別を導入したのも、小室である。さらに、(AGIL図式にいうような)機能要件の相互連関と、投入-産出分析(相互連関分析の一種)との、同型性を指摘する。そして、システムの構造変動と、関数族に関する理論として処理することと、示唆するのである。

たしかに、構造=機能分析は、対象を構成する諸要因が相互に連関しあひひとつシステムをなすものであることを、当初から想定

しており、その中で、相互連関システムをモデルの下敷きにしていくことは、明らかである。それゆえ、上述したような、小室の個々の論点は、いずれも妥当と言えざるはずだ*)。しかしながら、小室の試みが全体として明らかにあるのは、構造=機能理論が、いまのやがたParsonsの dilemma につきあたらないゆけにはいかに、という狭小路の掘削なのではないだろうか？

たとえば、小室がその重要性を強調している、限界機能分析を、例にとりあげてみよう。限界機能の概念については、機能連関問題の項でとりあげておいた(→P52f.)が、ここでも、論述の便のため、つぎのようなシステム(the Komuro System)を前提とする。

$$(53) \quad f_i(x_1, x_2, \dots, x_n; \alpha_1, \dots, \alpha_m) = 0 \quad (i=1, n)$$

このシステムの均衡値に対して、第j番目の機能要件の充足水準は、つぎの式によつて決定される。

$$(54) \quad r_j = R_j(x_1, x_2, \dots, x_n) \quad (j=1, l)$$

さて、このシステムの第j番目の変数 x_j がある変化をたげたとき、当該の機能要件 r_j の充足の度合は、どう変化するだろうか？

$$(55) \quad \frac{dr_j}{dx_i} = \sum_{k=1}^n \frac{\partial R_j}{\partial x_k} \cdot \frac{dx_k}{dx_i}$$

この reasoning は、つぎのようだ：(53)を前提とすれば、ある変数 x_i が単独で変化することはできないから、同時に他のすべての変数を動かして(まわす)とすれば、 x_i が、均衡値のまわりで、他の諸変数をどの程度の割合でどの方向に変化させるのかを知り、たしかに、各変数の、均衡値のまわりでの、当該要件 r_j に関する貢献の度合を知らなければならぬ。すなわち、(55)の値は、 $\frac{dx_k}{dx_i}$

*) といゆえにこそ、本論全体の、構造=機能分析の定式化も、小室の再構成に即して、あるいは、これをさらに徹底させようという方向で、なされたのである。

($k=1, n$) を知らなければ、之らにたいするものであるが、この値は、均
 衡条件 (53) を x_2 で偏微分した方程式体系を解くことによ、之、は
 じりて之らにたいする——すなわち、システムの構造 f_1, \dots, f_n につい
 ての十分な知識がないなら、互にひとつづつ知ることができない。すな
 わち、限界機能の概念を定義することはできても、之して、(54) に
 示すような分析の簡便を示すことができない。実際上の分析は、互
 にひとつづつ行いえないのである*。

相互連関分析を専ら課題とする一般均衡理論では、相互連関を
 あらわす関数形 f_1, \dots, f_n については、必要な限り知識がえ
 られる、と考へてもいい理由があった。 $\partial f_j / \partial x_k$ は、Slutsky
 方程式によつて与えられたのであり、之らにはまた、経済主体の行
 動仮定によつて、根拠をえていた——つまり、相互連関分析
 の種々の分析装置は、経済事象にかかゆる凸状仮定 (Convex Hypo-
 thesis) から、その有利な帰結のあらかたをひきだしていきるのであ
 る。ところが、これに対して、構造-機能理論は、たとへ Komuro
 System によつて、一般均衡理論と同様の表現をえたかに見えても、
 その分析に必要な情報は、互にひとつづつとして、与えられてい
 るわけではないのだ。このことは、これ以上に構造-機能分析を形式化し
 ていこうという試みの前途を、疑わしくする。

N.B. 吉田氏と小室直樹とは、機能主義理論をどこまで一般化し
 うとする、ひとかたならぬ情熱的な志向において、共通している。が両者の
 差異にもまた、注意が向けられて然るべきだろう。吉田の場合には、一般化
 は、論理の形式化へとすすむが、互に、概念の(という)、分類表の)一
 般化へと、また向いている。之は、時として、没論理と言ってよいほどの
 極端な形をとるが、之れでも、構造-機能分析の枠組を、具体的な社
 会事象を説明するための仮設的な言明の体系として築きあげてい
 うという姿勢は、明瞭に保持されている。之ゆえ、吉田の主張は通
 常「吉田理論」と、個人名を冠せられているようだ。之れに対して、

* この点は、さきに恒松直幸が指摘したところでもある。

小室の場合は、一般化の力点は、主として分析論理の拡張に注がれてい
 るおもなきがある。(もちろん、たしかに之は、小室のいわゆる「構造-機
 能分析の部作」が完成してみるまでは、何とも言えないが) 小室の仕事が「小
 室理論」とよばれるとすれば、それは、分析論理に乏しい特殊な仮設的
 前提を特定するという作業が、互に進んでいないからであろう。社会学的な洞
 察に富んだ特殊な社会モデルを開発するのはない限り、構造-機能
 理論の分析論理も、その威力を發揮できないはずである。

Parsons は、均衡が条件であることを理解しなかった、と小室は
 指摘している。たしかに、Parsons の均衡概念は、一般均衡理論に
 いうような、条件としての含意を、ほとんど含まない、と言えよう。
 しかし、これは、かえってつぎのように考えられるのではないら
 うか? ——機能要件をたてるのが、社会システムの記述を簡的に
 あるためである、すなわち、 f_1, \dots, f_n について(構造の精緻な
 組み立てやその細部について) 知らなくても、社会システムの機能
 要件が何と向であるか、等について知ること、社会システムの状
 態(の変遷)について、ある程度の確かな知識をうることを、目標に
 していた、とするならば、そのような理論は、相互連関分析の対極、
 つまり、強力な目的論的な構成 teleologic construction をとらざる
 をえない。Parsons の理論が、まさにそれである。機能要件が、決
 して条件でなく、自動的にみたまはるものの如くである、というの
 は、Parsons がかの dilemma に陥ったために、どうしてもとら
 ずにはなかった、必然的な論理構成だったのだ、と。

機能要件とは、相互連関システムから直接みちびきだされるもの
 ではない。ぎゃくに、相互連関システムとは切りはなされたところ
 から、(理論家によつて) 外的に要請されるしか、ないものである
 のだ。Parsons の AGIL 図式は、たしかに、このようにして要請さ
 れたのであることは、たしかだろう。

小室は、Parsons の理論がもつさまさまな欠陥に、早くから気付
 き、之れを指摘してきた理論家であるが、同時に、その欠陥にもか

かゆらぬ、社会理論を構成するための叩き台ないし足掛かりとして、Parsonsの構造=機能分析の枠組が有用である、として、Parsonsをきりめなく高く評価してもある。しかし、Parsonsの理論は、(少くとも一般理論として)とてい程に上等のものか、たろうか？ 構造=機能分析は、一般化されるにふさわしい枠組を、用意していたのだらうか？

Parsonsのdilemmaは、この点に関して深刻な疑念を、ゆいゆいに抱かせる。構造=機能理論は、Parsonsの本意にある間は、社会システムについての概括的なイメージを与えてくれるかもしれないが、概念の曖昧さや随所の論理的な不整合を払拭することができない。か。かといつて、形式化への途をたどろうとするならば、本論で紹介したような種々の問題に、つきあたる。として、それを突破し、構造=機能理論が、厳密な定式化を施された水準にあるときには、この理論は、理論の簡潔性の現準に違反して、相互関係分析に対する優位を保てないであらう、とみこまれるのだから。

もし、Parsonsのdilemmaに気が付かず、しかも一般均衡理論というconvex structureに匹敵するような基本仮定を社会領域のなかに見出すというあてもないまま、一般均衡理論的に社会理論を再構成することのみによつて、社会理論の未来を切り拓こうとするならば、その試みは、空疎な一般性以外の普遍性をもった命題群をみちびくことができないうであらう。

結

すでに、予定した紙幅を大きく超過しているのだから、ここでは、これまで議論した論点を簡潔に総括しながら、構造=機能理論の射程と限界とに関するゆいゆいの見解を、提示してみよう。

めよう。

*

本論全体でゆいゆい試みようとしたのは、ありうべき社会理論の現準に照らして、構造=機能理論を批判する、という、一種の理論批判にほかならない、と書いていいたる。社会理論とは、どのようなものと考えられるか？

社会理論とは、社会(ないし社会事象)に関して、(向らかのいみで)正しい(ないし妥当な)言明(のすべて)である——とりあえず、ゆいゆいは、こう考えておこう。正しい言説(だけ)を構成していく仕方を、その理論の持つ方法とすることになれば、社会理論もまた、(たとえ今日「科学的」とみとめられているような実証法をとるとは限らないうにせよ)向らかの方法をそなえていなければならない。理論は、自らの方法に自覚的でありつづけることによつてしか、理論としての自らを維持していくことができなくなるはあつたのだ。

構造=機能理論は、どのような方法をもつているのであろうか？ 私の考えるところ、機能主義にちなむ理論は、自らの方法になお無自覚であつて、自らの理論がどのような仮設(体系)の上に構成されているかについて、充分理解を求めないとは、どこもいえない。

N.B. 構造=機能主義の一般的な現状は、擬似科学ともいふべきものである。機能というtermは、しばしば、船と比喩が原文の用に用

*) ここで、このような言明自身が、ひとつの社会事象であることに由来する(社会理論の帰属的性格に由来する)一種の複雑な事情——好んで、批判理論やイデオロギー批判が抱く——にかたして、考えたいであらう。また、二つと相通することであるが、社会理論が言及する対象である社会(事象)が、あたかもそこにあるかのように存するもの、と考えることとして、話をすすめる、しよう。

いられており、その概念の内容及び徹底して掘り下げられていない。そしてまた、数学的衣裳をまとっているために、ある場合には、浅薄皮相な人権理解とも結びついて、議論が一人歩きしやすい。しかし、私の主張の要諦は、そうした点にあるのではない。構造=機能分析の本来の姿は、それほどつまらないものではないのだから。

構造=機能分析は、構造=機能理論へと、自らの論理を体系化することによって、自らの方法を対自化し、検証すべきである。そして、構造=機能理論の本質的な方法は、〈機能〉を仮設して、社会事象を妥当に記述(説明)しようとする。しかし、構造=機能理論の論理整合性をきつめとしてく限り、〈機能〉を仮定することによって、妥当な社会理論が構成されるという根拠は、いろいろ検討してみたが、さしあたり発見できなかった。

N.B. 以上の主張は、機能概念一般に対する非難ではない点を、誤解のないよう、ついでに加えておこう。

社会事象の相互関係の存在は、実質上の「制約」ともみなしうるような回路が見出せるのは、たしかだから、機能的論理がなくなってしまうとか、機能概念なしではまかせないかならないとか、いうことはない。ちょうど言語学において、「機能的構文論」が、「標準理論」の大枠を認めながら、その周辺に機能的説明をなるべくもちこもうとしているのと、同じような意味合いにおいて、ゆいゆいは、機能概念に、社会理論のなかでの用途的な位置を配当(たいと思)う。機能的要請は、生起する社会事象を制約する、外的な制約条件をなしているのではないか、あるいは、機能は、社会事象の副次的な制約条件として抽象するものではないか(どうたとしても、現に生起している社会的な事態を、確定した均衡値を示す如くに記述(して)しただけの力は、とてもないのではあるまいか)? このように、構造=機能モデルを確定できないと、みれば、機能概念の説明力をいちぢるしく減殺してとらえることになるから、機能主義を誤りであると考え(以外にない)。

いま、社会理論にとって大切なことは、何か? たとえば機能という概念に拘泥するよりも、人間の社会的本性に眼を据え、社会事象の固有な特質をなんとか理論の中心において、それを説明できるような工夫することの方が、はるかに肝腎であり、本道であると信じるが、どうであろう。構造=機能理論に即して言えば、本論をとりあげたような諸々の困難を克服するためにも、社会のより特殊で具体的な構造=機能モデルを作ることが、もっとも理論の生産性が高いだろう、と考えられる。

(以上、181枚)

【後記】

構造=機能理論という、必ずしも私の得意でない分野に関連して、この文章を記すことができたのも、多くの方々の御教示や、さまざまの機会での討論の賜物です。ことに、吉田民人氏と吉田せみ出席の諸氏、そしてとりわけ、小室直樹氏と小室せみのメンバー諸氏には、この場をかりて、感謝したいと思います。

文献

- 青井和夫(編) 1974 『理論社会学』(社会学講座 1) 東京大学出版会。
- 新 睦人 1975 「機能分析への批判と反批判について — 古典的命題と新しい命題 —」(résumé)。
- Debreu, G. 1959 Value Theory: An Axiomatic Analysis of Economic Equilibrium J. Wiley & Sons
- 橋爪大三郎 1974-1976 「比較静学」(未発表)。
- 1975 「顕示選好 (Revealed Preference) 理論」(未発表)。
- 1976 「顕示選好」(未発表)。
- 1977a 「一般均衡理論の原理と限界」(未発表)。
- 1977b 「記号空間論(素描)」(未発表)。
- 1977c 「位相空間論」(résumé)。
- 今田 高俊 1977 「カイアド関係の安定条件」『社会学評論』27-4:22-41。
- 岩村 聯 1966 『電論』。共立出版。
- 梶田 優 1974 「変形文法」『英語学大系 4(文法論 II)』:163-667。大修館。
- Kelley, John L. 1955 General Topology Van Nostrand Co.,
- 見玉之宏訳『位相空間論』1968, 吉田書店。
- 小室直穂 1974 「構造-機能分析の論理と方法」青井和夫(編)【1974】:15-80。
- 久野 暁 1977 「人間・機械・ことば」(résumé)。
- 見田 泉介 1972 「価値空間と行動決定」『思想』578:1-16。
- 三浦つとむ 1971a 『マルクス主義と情報化社会』, 三一書房。
- 1971b 「土川敏男の〈営存〉論」『試行』33:69-89; 『現実・弁証法・言語』:166-205, 1972, 国文社。
- 太田 朗 1974 「新言語学の文法論概観」『英語学大系 4(文法論 II)』:1-162, 大修館。
- 白倉 幸男 1977 「社会行動と意思決定」『シオロゴス』1:18-27。
- 竹田 郁郎 1967 「マス・コミュニケーションの機能」『今日の社会心理学』4:391-530。培風館。
- 吉田 民人 1974 「社会体系の一般変動理論」青井和夫(編)【1974】:239-308。
- 吉本 隆明 1969a,b,c 「機能的論理の限界」『——の位相』『——の批判』(『海』5月-7月); 『情況』:45-98。1970, 河出書房。

橋爪大三郎 (Hashizume, Daisaburo)

1977-12-30 completed

1978-1-5 1st print